

ポケットモンスター・流れる藤色

魔女っ子アルト姫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の一歩は、大きすぎた。

その為に大切な友達を大きく傷つけ、取り返しが付かなくなった。

そして新しい出会いは安らぎと理解者を与えた。

その果ての新しい冒険、その先に広がる景色を見に行く——隣に居る少女と共に。

第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
79	72	67	62	57	52	47	42	37	31	26	21	16	11	6	1

目次

第1話

陸地の最果て 海の始まり。それがこの街の標語とされている。事実この街はハウエン地方の陸の終わりであり、これから先の街へは海路しか存在しない。だが同時にこの街こそが最大の壁にも成り得る事はトレーナーならば誰もが知っている事だろう。それをその身体感した少女は今、ポケモンセンターの一室に引きこもるようにしながらシヨックに打ち拉がれ、一つの終わりを自分で選んでしまった。

大粒の雨が降る。海沿いの街というのもあつてか強い潮風が雨雲を運んできたのだろうか、酷く大粒で一瞬のうちに土砂降りになった雨に人々は軒下を求めて歩く中、たった一人の少年は空を見上げるようにしながら力なく雨に打たれ続けていた。

「……」

身体についていた汚れ、汚れというには白いそれは雨によつて洗い流されていく。それが目的という訳でもない、何も考える事も出来ず唯々外に出たら雨が降ったので上を見上げてそのままの体勢になっただけだった。これからどうしようなどという事も考える事も考えないまま……身を委ね続けているとズボンが引つ張られた。

「フイ……」

「サナア……」

「グラアツ……」

同時に雨が止んだわけではなく傘が自分を覆った。それを行ったのは自分にとつて最も大切な三匹のパートナーたち、不安げな顔で自分を見るのは幼い頃に卵から孵して以来の付き合いのイーフィ。心配するのではなく唯々笑顔を向けるのは初めて自分が捕まえたポケモンのサーナイト、肩を力強く抱いたのはポケモン博士であるオダマキ博士からのプレゼント、初めて貰ったポケモンのラグラージ。

極めて長い付き合いの3匹は自分が如何して欲しいのかを分かっているらしい。同情して欲しい、心配しないでほしい、慰めて欲しい。そんな矛盾しきっている気持ちを皆で担当して自分を励ましている、

そんな気遣いが心から有難くて嬉しかった……。

「ごめん心配かけたな……寒いだろ」

「フイツ」

肩に飛び乗ったエーフィ、頬擦りをしながらも頬を舐める。寒いのは其方でしようと言いたげなエーフィの身体はとても心地よかった。ラグラージの力強い手は水タイプゆえかヒンヤリとしているが熱かった、サーナイトの笑みはとても暖かかった、こんな駄目なトレーナーなのに自分のポケモンは此処まで自分を慕ってくれている事に喜びを感じずにはいられない。そんな時だった、傘が雨粒を弾く音が増える。振り向いてみるとそこには——今日行われた行事の審査員をしていたポケモンリーグのチャンピオン兼トップコーディネーターでもあるミクリが此方を見ていた。

「ジョーイさんから話を聞いてね……大丈夫かい」

「……あんまり、ですかね……ずっと一緒だった幼馴染に絶縁宣言喰らいまして……」

「それはっ……いや僕が謝る事が筋違いだろう、僕は正当な評価を向けたと自負している」

謝罪の言葉は自分にとっては毒だと理解して即座に言葉を切り替える辺り流石だと言わざるを得ない。

——今日、ポケモンコンテストの最後の大会であるミナモ大会が行われた。コーディネーターとしての祭典、ランドフェスティバルへと向かう為の最後の切符であるコンテストリボン5つ、その最後のチャンスであったそれを巡って自分と幼馴染はそれに望んだ。そして——優勝したのは自分だった。

そもそも自分はコンテストではなくバトルの方に専念していたのだが、一緒に出ようや才能があるという幼馴染の言葉に惹かれてコーディネーターデビューを行ったが自分でも思う以上の才覚があったらしい……それはトップコーディネーターの母を持つ、そんな母のようになりたいと望み努力してきた幼馴染以上の才覚が……。

「何でっ何でなのよ!!なんでコンテストなんて気にかけてなかったアンタがランドフェスティバル何かに出れるのよ可笑しいじゃない

!!あんなに頑張つて、ポケモンのコンディションだつてアンタよりもずっと、何倍も気にかけてきたのに……何でアンタなんか私の努力を全否定されなきゃいけないのよ!!アンタなんてもう知らない、もう一緒に旅なんてしたくもない!!消えてつもう私の人生から消えてつ!!二度と私の前に現れないで!!!」

これまでも見せ付けられた才能の差、積もりに積もっていた物が遂に爆発してしまった。身体の汚れもその時の物、彼女が大好きなケーキを食べようとした時の事……人生から消えてツとまで言われるなんて思いもしなかった故にダメージは測り知れなかった。

「君はこれからどうするんだい、このまま次の街へ向かうのかな」

「……いえっホウエン地方から離れようと思つてます、あいつがそれを望んでるなら叶えてやろうと思います」

「……そうか、それなら私からの頼みを聞いてくれないかな。私の親戚の娘さんが間もなく旅に出るんだが……如何にも子煩悩でね、先輩トレーナーの助力が欲しいとの事だ、イツシュ地方なんだがお願い出来るかな」

何処か苦々しく言うミクリ。彼に非はない。審査員として公平なジャッジと審査に努め、そうであるべきだと思つた通りにしたままで彼を恨むのは筋違い。それでもミクリは罪滅ぼしだと言わんばかりに他地方への推薦をする、ある意味丁度いい話なのかもしれない……バッチは8個揃っているのでリーグへの出場資格はあるが……構うものかとそれを受諾する。

「素直に感謝するよ、その子は如何にも臆病というか……酷く口数が少ないタイプの子でね」

「もしかしてその子って……トウコ、ちゃんですか?」

「フツ正解、あの子も君ならぜひ一緒につて言つてたよ」

「謀りました?」

「まさか」

手を上げて無実を主張する。トウコ、ミクリの遠縁の親戚の娘で自分の3つ下。ある事件を切っ掛けに彼女に懐かれているが……如何にもこれは誘導されたように思える。だがそれでもその話を断るつ

もりなどは無かった。

「よしっそれじゃあ善は急げだ。早速出発しよう、荷物はジョーイさんに頼んで持つて来てあるよ」

「……手早すぎでしょ」

「フフッ僕は必ず君が引き受けてくれると確信していたからね、いや本当は気まずいだろうから僕のホテルに誘おうと思ってただけなんだけどつまあ結果オーライさ。取り敢えず僕のホテルでシャワーを浴びて着替えてからにしよう」

そう言つてミクリは自分のホテルへと向かつて行く、その姿を目で追うとエーフィ達が自分を見つめていた。如何する気は自由、自分達は従うと言いたげなそれに迷うことなく行こうと言った。その途端にエーフィは笑顔になつて先導するようにミクリに続き、ラグラージも肩をバンバンと叩きながらそれに続く。それらを見つめながらまるで母親のように笑いながら自分の手を取つて行こうと誘うサーナイト——それに少年、いやリヨウマは歩き始めていた。

「——リヨウ、リヨウ。起きて」

「んっ……」

何か昔の夢を見ていたような気がする……それを揺さぶつたのは文字通りに身体を揺すつていた旅のお供であるトウコであった。寝ぼけ眼を擦ると周囲は飛行機の機内だった。

「着く、準備」

「……？」

「寝惚けてる……お使い」

「……ああそうか、思い出した……」

そこまで言われて漸く思い出せた。トウコを伴つての旅も3年が経とうとした頃、丁度イツシユに里帰りしていた時にイツシユのポケモン博士ことアララギ博士にお使いを頼まれたのである。行先はガラル地方、そのマグノリア博士に研究に関する物を届けて欲しいらしい。態々自分達に頼まなくても良いとは思うが、ガラル地方も旅を試してみるのも悪くないだろうとの事、要するこれをきつかけにしてガ

ラル巡りをして来いという事だ。

「しつかし……態々何で推薦状なんか渡してきたんだか……まあこれのお陰でラグラージも連れて行けるわけだが」

「兄さんと石マニアの推薦、無視出来ない」

「だろうけど現元チャンプになんつう口を利いてんだ」

「マニアはマニア」

それは否定しないっというか否定出来る要素が皆無なのは事実だが……それでも自分にとって憧れのチャンピオンを悪く言うのは余りいただけない。

ガラル地方では生態系を守る為にガラルに生息していないポケモンの持ち込みなどが厳しく制限されている、ラグラージは連れて行けない筈だったがミクリとダイゴというこの二枚看板のお陰で相棒の一匹を連れて行ける、自分にとっては感謝しかない。

「トウゴ、お前の口の悪さは何とかならないのかってこのやり取りも何回目だ」

「無理」

「即答すんな」

旅をしている間ずっと言ってきたが全く治らないトウゴの言葉遣い、これはもう不治の病の域だろう。

「じゃあ直すから、認めて」

「年取ってから出直せ」

「ムウツ……」

自分達にとつてはお決まりをやり取りをしていると遂に空港が見えてきた、それと同時に雲海が開けてガラル地方が見えてきた。

「……リョウとの冒険、始まりはドキドキ」

「旅の始まりはそんなもんだ、さてと……どんなポケモンと冒険にであるのかな?」

第2話

「んっく漸くついたかあ〜……」

「……長い」

「イツシユから来てるんだ遠くて当然だ」

荷物を背負いながら身体を伸ばすリヨウマ、その隣で酷くげんなりした表情で早くも疲れている表情を浮かべているトウコ。漸くガラル地方へと到達したというのに不景気な顔をする旅のお供に呆れた顔を作る。飛行機で十数時間、それだけガラル地方は離れた土地にあるのは分かり切っていたのにこの有様というのは流石にあれ過ぎる。

「帰りもこれ……憂鬱……」

「今から帰りの事考えて如何すんだ馬鹿」

「暇、退屈、狭い」

「あ〜あ〜分かった分かった……」

年頃の乙女に十数時間座りっぱなしはきつかった模様。と言っても自分も暇は暇だったのだが暇潰しの為の道具やらはあったのでそれを活用したに過ぎない。一重に準備不足という言葉で片づけられてしまうのだが……此処まで不満げな顔をされると如何にしかしたくなる程度にはリヨウマは兄貴肌なのである。

「帰りはビジネスクラスにしような」

「……ファースト」

「おい幾ら掛かると思ってたんだ」

「——駄目？」

「あ〜分かった分かった、ずぶ濡れのポチエナみたいな顔すんな」

「ヨーテリーのつもりだったけど？」

そんなやり取りをしながらも少し重い身体を持ち上げながら歩いて行く。如何にも自分は女の困り顔に弱い節がある、いや見ず知らずの女なら振り切る事は簡単なのだが如何にもトウコのそれにはかなり弱いと思っっている。3年も一緒に居るせいだろうか……それとも自分が求めているからか。

「んじゃ次は電車だな、こっからマグノリア博士の研究所の最寄りか

ブラッシータウンだろ。だから……数時間は電車だな」

「——ライドオン……?」

「イエス、ライドオン」

「……やーだー……」

「はいはいっ後で飯奢ってやるから早く行こうね」

絶対やだと言う割に騒ぎもしなければ暴れる事も無くリヨウマに連れられるままのトウコ、十数時間の間飛行機に揺られたのに今度は数時間電車に拘束されるのであった。

「さあつて到着いたしましたわねブラッシータウン」

「……当然、乗り物要らない……」

到着時よりどんよりとした空気を纏ってしまっているトウコ、駅前のベンチに座っている彼女にジュースを差し出すとちびちびと飲み始める。物静かだがポケモンと一緒に外で遊ぶことは好きな彼女にとって飛行機と電車の長時間拘束は堪えたらしい。

「まあ兎に角これからは身体を動かせる、よく我慢したなトウコ」

「……撫でて」

「あいよ」

帽子を脱いで頭を差し向けてくる彼女の頭を撫でてやる。旅を始めた頃、彼女を褒めた際について撫でてしまった時にその感触に嵌ったらしくちよくちよく要求してくるようになった。その理由は様々だが今回は頑張って自分へのご褒美目的だろう。そんな風に撫でて続けていると背後からおずおずと慎重な声が掛けられる。

「あ、あのっ……すいません、リヨウマさんとトウコさんでしょうか」

自分達の名前を呼ぶ声に振り向いてみるとそこには中々に良いスタイルをしているオレンジのサイドテールの女性が此方を見ていた。女性にトウコはリヨウマを盾にするように隠れる。

「そうですか」

「ああよかったっちゃんとお会えた……えっと本日おばあさま、じやなくてマグノリア博士の所までご案内する、いえしますソニアです」

「……リヨウ。名前違う」

トウコの言葉に同意する、案内をしてくれる人の名前は確かダンデ。博士の古くからの知り合いで信頼出来る人物だと聞いていたのだが……それに対してソニアは気まずそうにしながら訳を話す。

「ええつとですね……元々案内をするはずだったダンデ君何ですけど……その、酷い方向音痴でして……御来客なのにそれだと失礼だからという事で急遽手が空いてた私が来たという訳でして……」

「……方向音痴に案内役、不相応」

「いや自分が行くって言ったんですけど……おばあ様が心配になったから私を……」

「ご苦労様です」

取り敢えず彼女が色んな意味で大変な立場な事だけは分かった。ダンデという男とそれなりに付き合いがある関係ゆえにフォローの仕方もある承知しているのでマグノリア博士も向かわせたのだろう。まあそもそも方向音痴なのに立候補するのもあれだが……無自覚なあれなのだろうか。

「兎も角研究所にご案内しますね、リヨウマさんにトウコさん。」

「お願いします、後呼び捨てで良いですよ。年近いでしょ」

「でもおばあさまのお客様だし……」

「……リヨウマがそう言っている、だから良い」

遠くから来て貰ったお客様に対して呼び捨ては流石に気が引けると思っていたソニアだが、未だに自分の顔を見てくれないトウコの何処か冷たい言葉を受けながらそれが本人たちの意見ならば聞き入れないと失礼に当たると思い咳払いをする。

「えつとそれじゃあ……リヨウマにトウコちゃん、これでいいかしら」

「ああつそつち方が楽だな、こつちもソニアって呼ぶからお相手って奴だ。んでマグノリア博士の所までは遠いのか？」

「少し歩く程度よ、あつもしかして移動で疲れてる？」

「しないで、歩く」

「えつ如何したの!？」

「単純にほぼ24時間乗り物に拘束されて好い加減動きたいんだと」「ああつ成程」

ソニア先導の元、研究所へと向かって行くがトウコが漸く自由に歩ける事への喜びを露わにしながらステップしている姿は少しだけ面白かった。研究所は駅から直ぐの距離にあり本当に少し歩く程度で到着した。規模としては小さい部類、と言ってもオーキド博士を筆頭にポケモンを預かる事もしている博士も多いから小さく見えるだけかもしれないが、中にはポケモンに関する資料がびっしりと収められていた。

「今お茶淹れるからソファに……って座りたくないわよね、楽しんでいいから」

トウコの事を思い出して直ぐに訂正しつつ奥へと進んでいってお茶の準備をするソニア、待たせて貰っている間に仕舞われている資料に目をやる。基本的なポケモンの資料やポケモンのタマゴについての論文、生息域の分布と環境の違いによる姿の違い、進化の分岐について、ポケモンの起源、進化による変化、ポケモンが覚える技についての考察 e t c ……流石ポケモン博士と言わんばかりの物ばかりに感嘆の域が漏れる中で見た事のない題名があつて惹かれた。

「何々……ポケモンのダイヤモンド——」

「イヌヌワツ!!」

そこで意識が途切れて其方へと向いた。そこには黄色い犬のような小さいポケモンが嬉しそうな顔をしながらトウコに抱かれていた。

「——リョウ。この子絶対にゲットする」

「お気に召したみたいだな」

「——超尊い」

目を輝かせながら抱いているポケモンが気を悪くしないようにながら撫でるトウコ、その優しい手付きにポケモンも気持ちいいのか声を上げて喜んでトウコのボルテージがグーンと上がっていく。冷たく物静かな印象を受けてしまいがちだが年相応に女の子らしい所もある、特に可愛いポケモンには目がない。初めて会った時も自分のイーブイにメロメロ状態になっていた。だがエーフィにはならなかった。

『イーブイは尊い、エーフィは美可愛い』

との事。分かるような分からない様な……と言った感じに本人の基準があるらしい。

「ソニアにこの子の名前と分布を聞いてみるか、あつそうだ凶鑑のアップデートも頼まないとな」

「名前……イヌヌワン？」

「イヌヌワツ!!」

「そうだってよ、リヨウ」

「流石に違うだろ……その理論だと一致しないポケモン大量にいるぞ」

そんな話をしていると研究所の扉が開く音がした、それと共に――

「流石マグノリア博士の研究所、何時来ても気になる資料ばかりだ!」

「兄貴でも気になる資料いっぱいなのか、俺も気になってきたぞ!」

「私も、ちよつと見せて貰えないかなあ」

二人の少年少女を伴ったマントを靡かせる一人の男が入ってきた。

第3話

突然の来訪、それに驚いたようにトウコはポケモンを抱えたままリョウマの背後へと隠れてしまった。腕の中では首を傾げるようにしつつも適度な抱き加減に満足気な笑みを浮かべているポケモンに肩を竦めつつも少年少女を伴ったマントの男が話しかけてきた。

「おっと先客様が居たのかっておやつ……もしかしてリョウマさんじゃないかな」

「ああ。其方さんは？」

「俺はダンデ、元々君の出迎えに行く予定だった男さ」

歯を見せるように笑う、気持ちのいい笑みだがその名前に思わずトウコが小さく無自覚方向音痴と呟いた。ソニアから聞いた前任の案内役という男かと思っていると奥からプレートの上にポットとティーカップを携えたソニアが何処かうんざりしたような表情をした。

「うるさいと思つたらやつぱりダンデ君か……今日は何、まだ見ぬ最強のポケモンを知りたいとか無茶振りは勘弁してほしい所よ。本来貴方が迎えに行く筈だったお客様のおもてなし中なんだから」

「やつぱり彼が噂のリョウマさんとトウコちゃんか」

「やつぱりじゃないわよ」

自分達に侘びを入れつつプレートをテーブルの上に置く、するとトウコに抱えられたポケモンに目がいき笑顔になりながら撫でた。如何やらソニアのポケモンらしい。

「あらっワンパチ嬉しそうね、トウコちゃんが気に入ったの？」

「イヌヌワツ!!」

「ワンパチ……？イヌヌワンじゃない？」

「良くある間違いね、ワンパチのニツクネームになってる所があるわねイヌヌワン」

抱かれていたポケモンはワンパチというらしい。予想と名前が違って少し残念そうだったが尊いからいいやと頬擦りをする。

「それでホップとユウリを連れて来てどうしたのよ」

「二人は新人トレーナーになったから先輩トレーナーのアドバイスを頼もうと思つてな」

「オッスソニア!!」

「おはようございますソニアさん!!」

ダンテの後ろからひよつこりと姿を現した二人の新人トレーナー、ダンテの弟のホップとその幼馴染のユウリ。ソニアともそれなりに付き合いがある為か顔見知り故か話が通るが早い、それ以上に二人はリョウマとトウコが気になっていた。

「なあなあ兄貴、その二人つて誰なんだ?」

「ああつ此方は他の地方からのお客様だ、リョウマさんとトウコちゃんだ」

「他の地方から!?カブさんみたいだな!」

と何処か興奮したような面持ちをしているホップと何処か遠慮しつつも自分達の話聞いてみたそうにしているユウリの姿が酷く初々しくて微笑ましく映った。

—— 今日から、此処から始めようね!!

—— うんっ!!初めの一步は一緒!!

—— せえっの!!

「っ……」

「リョウ」

「っ大丈夫だ、ちよつと長旅で疲れてるだけだ」

心配するトウコの言葉を軽く受け流す。だがトウコは分かっている、疲れは本当ではあるがもつと根本的な所は別の所にある。最早彼にとつては地獄でしかない過去の想い出、例えばどんな楽しく美しい思い出であつても最終的に到着する場所は地獄にしかならない。故に思い出さない事が望ましい、だからこそ心配する。思い出さないなんて無理だから、彼にとつてその地獄は——彼にとつての根源なのだから。

「あつそうだソニア、ポケモン図鑑が貰えるつて聞いたぞ!!」

「おつとそうだった忘れる処だった、それじゃあスマホロトム出して」
その言葉に反応するように二人のバックからオレンジ色のスマホが飛び出した——がそれには明確な顔があり声を上げてソニアの周囲を飛び回っていた。

「ケテテテテッ!!」

「相変わらず元気だね〜っそだ、リヨウマとトウコちゃんの凶鑑もついでにアップデートしたげるよ」

「そりや有難いが……今時の凶鑑はスマホと一体化してるのか？」

「あれっロトム見るの初めて？」

「いや俺も持つてる、寧ろ凶鑑の方に驚いてる」

今二人のスマホにはロトムというポケモンが入っている。ロトムは電化製品の中に入る事が出来、それを利用して姿や能力を変えるフォルムチェンジの能力を持っているが近年ではそれを利用して人の役に立って貰っている、それがロトム凶鑑やスマホロトムに当たる。最近では凶鑑だけではなくスマホとも一体化しているらしい。

「ほらっアプリみたいになってるのよ」

「はあく……時代はどんどん進んでいくもんだな。俺なんかずっとこれだぞ」

「……これ」

そう言いながらリヨウマとトウコは自分達が博士から受け取ったポケモン凶鑑を取り出した。何方も明確にポケモン凶鑑としての機能と他にも基本的に身分証明書程度にしか使えない物でしかない旧型。

「おおっ！昔兄貴が使ってた奴に似てるぞ！」

「ほえっく……昔はこんな感じだっただねっちよつと可愛いかも」

「いや俺より前のタイプだなりヨウマさんのは」

「なんだろう、なんか年取った感じがヒシヒシと……」

まだまだ若いつもりであるのだが、こんな風の事を言われてしまうと如何にも年の事を自覚せざるにれなくなってきたしまった。

「大丈夫、リヨウは若い」

「年下のお前に言われてもなあ……」

「私は気にしない」

「俺が気にするって話だっつの」

取り敢えずアップデートの為にソニアへと渡す。そんな反応をするトウコはそうじゃない……と言いたげに膨れっ面をしながら自分の凶鑑を渡す。

「折角だからスマホロトムに買い替えちやつてもいいんじゃない？」

「やなことだ、そいつは俺が旅を始めた時からの付き合いだ。それを簡単に切るなんて俺には出来ないな」

「同じく。思い出、いっぱい」

買い替えてしまうのは本当に簡単だ、だが思い出はそうはいかない。

「だな、俺も何だかんだで使った凶鑑はずっと持ってるし」

「やっぱり大事なんですか？」

「そりゃそうさ……沢山の初めてと嬉しさと驚きをくれた夢の機械だからな」

トウコもそれに頷いた。初めてみるポケモンに凶鑑を差し向けて名前とタイプ、生態概要を知ってこんなポケモンが居るのか、このポケモンを捕まえたいというのは凶鑑がくれたような物なのだから。

「俺が今連れてる手持ちの一匹も初めて捕まえたポケモンだからな」

「初めてのポケモン!!」

「やっぱり素敵だよね、嬉しいですよね!!」

新人トレーナーである二人も懐かしみ楽しんでいるその笑みに思わず同意を浮かべて頷いてしまった。そんな思い出を運んできてくれた凶鑑はとても大切なものだと思いきや、ソニアの周囲を飛ぶスマホロトムを見てこれからあのロトムが自分に色んな初めてをくれるんだろうなあと思いに耽ると思わずダンデが笑った。

「懐かしいな、俺も今の二人みたいにワクワクしたもんだ。そう言えば二人は何処の出身なんだ？」

「俺はハウエン、トウコはイツシユ」

「ハウエンにイツシユ地方か、それは是非とも話を聞きたいな。カブさんの故郷の話も興味深いけどイツシユの話も……聞かせて貰っても

「いいかな？」

「ずるいぞ兄貴!!俺だつて聞きたいぞ!!」

「あつあの私もお願ひします!!」

「いいかトウコ」

「リヨウがいいなら、良い」

「あつちよつと待つてよ私だつてその話めつちや聞きたいよ!!まつて後生だからアップデートが終わるまでは待つてすぐ終わらせるからあゝ!!」

慌てて駆け出して行くソニア、そんな彼女は宣言通りに直ぐに終わらせて凶鑑を持ってきたが新人二人は聞きたくてウズウズしていたのかソニアを責めてしまった。それを笑いながら抑えるダンテと同じく笑いながら謝つて席に着きながらもメモの準備万端なソニア、肩を竦めつつもホウエンとイツシユの話をしていく。

——が、これが思いの他ガラル組に好評で白熱してしまいソニアがマグノリア博士が自宅までリヨウマとトウコを連れて来て欲しいと言われていたのを思い出したのは2時間ほど後であった。

第4話

「ハアツ……まあ遠くの地方から来たお客様を休ませたつという事にしておきましょう。ですが時間と約束を守れないのは減点です」

「はいっすいませんおばあ様……」

話を聞いている最中、マグノリア博士から自宅までリヨウマたちを連れて来て欲しいと言われていた事を思い出したソニアは大慌てで二人を連れて博士の自宅まで向かう。その遅刻の弁明としてダンデがユウリとホップを連れて同行、話を聞いて博士は一定の理解を示しソニアの事も許す。彼女の興味も分からなくないし、何より遠くから来た二人を休ませる事になっている。

「アララギ博士からお預かりした物です」

「ええっ態々御足労をお掛けしましたね、確かに受け取りました」

老齢でありながらも確りとした言葉とやや厳しそうな鋭い顔付きはトウコは少しリヨウマの後ろに隠れる。自分が今まであつてきた博士とは違った雰囲気を感じているからだろう。ポケモン研究は何方かと言えば男性の方が多い傾向があり男社会的な所がある、アララギ博士は女性だが彼方はまだ駆け出しの領域。だがマグノリア博士は長年その世界に居続けながらも成果を出し続けている女傑。

「リヨウマさんとトウコさんはこの後は如何するのですか、このままお帰りに？」

「いえっ折角他の地方まで遠出して来たので色々見て回りますよ」

「ジム巡り」

と二人は今までやって来た地方でも同じことをするつもりだと話すのだが、それに関してダンデは少々困ったような顔をする。

「あゝ……濟まない二人とも、この地方では所謂ジム巡りはジムチャレンジと言われていて決まった期間にジムを巡ってバッチを集めるんだ。全てのバッチを集めたトレーナーは最終的にトーナメントに進んでジムリーダーらと争ってチャンピオンを決定するんだ」

「大分違うな」

「ああ、しかもチャレンジするには推薦状が不可欠なんだ」

ガラルのポケモンリーグは他地方とはシステムがだいぶ異なる。ジムも上位8位をメジャーと定め、それ以下をマイナーとしチャレンジもメジャーを巡る事になっている。他地方と比べて明確に興行として扱われている。そして最後のリーグもトーナメント形式なので四天王が存在しないのもかなり異色。

「出来る事なら俺が出してやりたい所なんだが……出せる数には限りがあってもうホップとユウリに渡してしまっているんだ、それにもう期限的に間に合わないだろうしなあ……他地方でも有名な人の推薦状とかあればなんとかなるんだが……」

「マジかあ……んじや此処じやジム巡りなしか？」

「リヨウ、リヨウ」

あちやあ〜……と頭を抱えるリヨウマの服を引つ張るトウコ、何か言いたげなので耳を傾ける。

「兄さんとマニアの」

「いやだからその言い方……ああそうだ、この二つがあつたな!!」

よくやつたトウコ!!と頭を撫でながらもリュックから二つの封筒を取り出してダンデへと見せる。

「これ使えないか？」

「ちよつと失礼……これはっ……!!ホウエン地方の元チャンピオンのダイゴさんと現チャンピオンのミクリさんの推薦状!?!これなら問題なく二人は出場出来るぞ!」

「おやつこれはまた大物の推薦状ね」

マグノリアも思わずそんな事を呟いてしまう程の超大物の推薦状、今日ばかりはトウコも真剣にあの石マニアに感謝の言葉を捧げるのであつた。

「やつたなつりヨウにトウコ!!一緒にジムチャレンジ出来るぞ!!」

「とういかホウエン地方の新旧チャンピオンからの推薦状って凄すぎませんか!?!お二人一体何者なんですか!?!」

「何っ大した事はないしがな!トレーナーだよ」

「リーグ常連が良く言う」

「それはおめえもだよ」

「リョウに引つ張られるだけ」

何処か羨望の視線を向けてくるユウリの言葉をやんわり受け流しておく、それでもまだまだ視線を向け続けるユウリに溜息が出る中、外を見たダンデが何かが落ちる音を聞いたので外へと出て行く。そしてすぐに戻ってきた。

「博士、お庭に願いの星が……しかも4つも」

「あらあらっこれは……きつとそうそういう事なのね」

ダンデの手の中には僅かに淡い赤い光を放つ4つの石があった。それは願いの星、不思議な力を秘めた石でガラルの宝物とも言い換えられる代物。加えてこの願いの星を加工する事でこの地方特有の現象でもあるダイヤモンドを扱えるようになる。

「そうですね、きつとこれはホップ達に反応して降ってきたんでしよう」

「おおっ!!最強のトレーナーになりたいって夢を叶える為に降ってきた事か!」

「そうなんじゃないかな、でも私は特に願いの事なんて思っていない筈なのに……」

兄であるダンデのようなトレーナーになりたいと思いつけているホップに反応したのは納得出来るが何故自分の所に願いの星がやってきたのかは良く分からないユウリ。自分には彼のような強い思いも叶えたいと思う夢も無い筈なのに……不思議な事もある者だと首を傾げる。

「ポケモンが巨大化する現象、ダイヤモンドか……興味深いな」

「ちょうどいい、チャレンジ観光」

「そうだな。ジムチャレンジをしながらガラルを巡るのも良いな」

4人全員がチャレンジに挑戦する意思を確認するとマグノリア博士は僅かに嬉しそうに頷きながらもダンデから願いの星を預かる。

「大した手間ではありませんから全員分加工しておきます、明日には全員分できるでしょう」

「おおっ!!博士宜しくお願いするぞ!!」

「宜しくお願いします博士!!」

「はいはいっ元気なのは良い事ですが今からそれではチャレンジの前にバテてしまいますよ、ソニアもう遅いですから皆さんの分の夕食の準備を」

「はいおばあ様」

マグノリア博士のご厚意で自分達は此処に泊まる事になった、それを感謝しつつ夕食の時間になったのだが……時間も遅いのでホップとユウリも共に最近ガラルの流行であるカレーライスと共に食べる事となった。

「なあなあリョウ、研究所での話の続き聞きたいぞ!!」

「んっ何処まで話したか」

「あれですよあれ!!トウコちゃんと一緒にポケウッドに出たって本当なんですか!?!」

「そうそうっどの映画なの!?!」

「あらっ出演したのですか」

「主にトウコがね」

「リョウが主演のもある」

そこで研究所でしていた話の続きがされる、イッシュのポケウッドの話は特に受けが良かった。そこで終わっていればよかったのだが……その話を聞いてソニアが速攻でポケネットからその映画をレンタルして鑑賞会が始まってしまった。

「ああじゃあ俺は外に居るから……」

「(ガシツ) 駄目、見る」

「いやネタバレ防止のために……」

「見る」

「いやあの」

「見ろ」

「……はい」

何故此処までリョウマが嫌がったのか、それは……

「ううっなんて、良い話なの……」

「なんていいハッピーエンド……」

「良作でしたね、リョウマさんの演技も中々でしたよ」

「……勘弁してください」

その映画は無口なお嬢様を主人公が外の世界へと連れ出し、時間を重ねて恋を、障害を共に乗り越えて最後には結婚するという物。そしてその主演はリヨウマとトウコ。トウコにとってはいい思い出なのだが、リヨウマにとっては黒歴史に他ならない。

「♪（大満足）」

「……いつそ殺してくれ……」

第5話

「着いたあゝ!!此処がワイルドエリアだああ!!」

映画で盛り上がった翌日、マグノリア博士から願い星を加工して作られたダイヤモンドバントを受け取るとホップが我先にとジムチャレンジの開会式が行われるエンジンシティへと駆け出していこうとするを追いかけてリョウマたちもそれに続いた。一度ブラッシータウンに戻りそこで列車に揺れる事数時間、到着した其処は——ガラル地方最大の目玉とも言おうべき大自然がそのまま残された巨大なエリア、その名もワイルドエリア。

正しく雄大、壮大、巨大。

一面に広がる膝まで伸びる草に巨大な湖、何もかもが規格外な程の巨大。ダイヤモンドが有名なガラルならでも言える光景だがそれ以上にその自然を自由に駆け巡るポケモンたち。自然の恩恵を全身に浴び、のびのびと、逞しく、幸せそうに暮らしている。

「でっかいサファリゾーン……」

「いやそれとは違うな」

「超でっかいサファリゾーン」

「そうじゃねえよ」

此方側で言えばエリアごとに決まってテーマがあり、様々なポケモンが暮らしているサファリゾーンがあるがワイルドエリアは違う。人間の手で作られた環境ではなくそのままの姿を残している。強いて言うならば遠くに見えるエンジンシティから次の街へ行く為の石橋の足がある程度しかないそのままの自然に思わずユウリ達も圧倒される。

「ウオオオオオッ俺もう我慢できないぞっ!!待ってるよワイルドエリアアアアアアッ!!」

「あっちゃよつとホップ!?一人で大丈夫ってもうあんなところに!」

と目の前の光景に我慢出来なくなってしまうのか、飛び出して行ってしまったホップに思わずユウリは伸ばした手が空を切る。初めての旅故に一緒に行きたかったのだろう。初めての冒険の高揚感

と好奇心もあるだろうがそれ以上に不安と恐怖がある、そんな彼女を見てトウコはリヨウマに催促をしそれを了承する。

「ユウリ、何だったら俺達と一緒に行くか」

「えっ!?!いい、良いんですか!?!で、でも私なんかじゃご迷惑に……」

地獄に仏!!と言わんばかりに助け舟を出してくれた事へ感謝をするのだが、即座にネガティブになってしまふ。旅に慣れている二人の迷惑になる事が目に見えているからだろう、だがそれをトウコが否定する。

「誰だつて迷惑はかける、私だつてリヨウに掛けた。今も掛けてる」

「テメエは少しは成長しろ。誰だつて最初は不安でいっぱいさ、ユウリさえ良ければ旅のアドバイスやらはする。まあ代わりにガラルのナビゲートは任せるがな」

「そつそれなら大丈夫です!!宜しくお願いします!!」

心からの笑顔を浮かべながら彼女の身体にはやや不釣り合いな大きなバツクを揺らしながら頭を下げる。これで三人旅が決まったと思つた時の事、後ろから声が掛けられる。

「あれっ三人だけ? ホップは如何したの」

ソニアだった。少し遅れて彼女もワイルドエリアへと到着したようだ。

「あつソニアさん。先に行つてしまつて……一緒に行くこうつて言おうとしたのを聞いてくれなくて」

「あつちやあ……人の話をよく聞かないのは兄貴譲りかなあ……」

「それでソニアはどつたのよ」

曰く、マグノリア博士から新しくトレーナーが旅立つけどお前は如何するのかと言われたとの事。それで思い切つて自分ももう一度旅をしながら様々な事を調べ直そうと決意したとの事。そしてダンテにも言われたので先輩として新人トレーナーにアドバイスやらをしようと思つて此処まで来たらしい。

「そつかユウリはリヨウマ達と一緒に行くんだ、折角だからアタシも一緒にでもいいかな。リヨウマからハウエン地方の伝説とかもまだまだ聞きたいし」

「お手柔らかにな」

「やったっ!!旅はきつと大人数の方が楽しいですもんね!!」

「……こういう賑やかは大事」

ソニアを仲間に加えて4人となった御一行は改めてワイルドエリアの土を踏む事になった。

「うわあつく……!!ねえねえロトムあのポケモン何!？」

『ホルビーロト!!』

「可愛いつく!!あつあつちの蝶々は!？」

『アレハ……』

「あつ地面からなんか出てきた!?!この子は!？」

『ユツユウリ待ツテホシイロト!?!』

初めてのワイルドエリア、初めて見るポケモンの宝庫のそこは新人トレーナーの彼女にとっては夢の園そのもの。視界一杯に広がる自然で思うが儘に生きるポケモンの姿は自分が良く見る羊ポケモンのウールーとは全く違う。今彼らの世界は自分と世界で完結している、そこに人間の要素はない。それがこれ程までに感動的に映るのかと自分でもびつくりするほどに感動しきり、スマホと一体化しているの言葉が喋るロトムを振り回していた。

「元氣ねえくでも気持ちちは分かるかな、私も初めてのワイルドエリアはあんな感じだったし」

「……同じ」

トウコにも覚えがある。リョウマが同行者となって初めての旅、イツシュを巡る度に出る時に初めての一步を踏み出した時の感動は今も覚えている。本当に感動する物がある。そんな風に思っているとユウリは好奇心の赴くままに何処かに行ってしまうようになる。

「あつちよつと待ってユウリ!!まだワイルドエリアの注意が済んでない!!」

「注意……?？」

「ええつこのワイルドエリアは凄いいけど本当に大自然のままなの!!弱肉強食の掟が全てと言ってもいい世界、つまりここのポケモンは他の草むらとか出てくるポケモン以上に——」

「キヤアアアアアッツツ!!?」

ソニアが言い切る前にユウリの悲鳴が木霊した。慌てて其方へと向かうと完全に腰を抜かしてしまっているユウリ、そしてその前には……巨大な岩の身体が連なったヘビのようなポケモン——イワークが大きな雄叫びを上げながらユウリに襲いかかろうとしていた。

「イワアアアア!!」

「あっあっ……!!」

『warning・warning・危険危険!!コノイワークハレベルガ高イロト!!』

「にっ逃げっ……」

スマホロトムが精一杯の危険信号を発する、ワイルドエリアは文字通りの大自然の掟が支配する。即ち弱肉強食、故か他の生息地よりもポケモンのレベルが高く中には周囲を縄張りとする高いレベルのポケモンの出現する。そのイワークは正しくそれに該当する。その威圧感に吞まれてユウリはモンスターボールに手を伸ばす事も考え付かなかった。恐怖に身体が支配されてしまっている、腰砕けになり立てなくなりそこへイワークがいわおとしを叩き込もうとする。

「不味いっユウリ!!」

ソニアが悲鳴染みた声を上げる、妹のように思っている少女の危機に何も出来ない自分が歯痒い。唯駆け寄ろうとするが到底間に合わない……と思った時だった。

「エーフィツスピードスター!!」

「フィイツ!!」

「イワアツ!!」

何よりも早く飛び出した閃光から飛び出した一匹のポケモンが放った星がイワークの放ったいわおとしへと炸裂していく。いわタイプの技のその軌道を変えるのではなく真正面から砕いて見せた。ノーマルタイプの技で砕くなんて思いもしなかったのだろう、イワークが驚愕する中でユウリの前にそれを放ったポケモン——最も付き合いが長いリョウマの相棒であるエーフィが降り立つ。

「くさむすびで動きを封じろ!!」

「フイツ!!」

地面を一度踏む、すると地面から草が伸びながら絡み合いながら無数の触手を形作るとイワークの身体を縛り上げて行く。イワークはもがいて脱出を試みるが相性最悪のくさタイプの子の技ゆえか上手く行かない。そして其処へリヨウマが到着しユウリを抱き上げる。

「リヨっ……リヨウマさん……!!」

「怪我は無いなっ!?よしっ退くぞエーファイ!!」

「フイツ!」

肩に飛び乗ってくるのを確認すると一気に駆け出して逃げて行く、トウコとソニアもそれに合流してイワークから兎に角距離を取った。少しするとエーファイとの距離が離れすぎた為かくさむすびが解除されて自由になったイワーク、だが後を追う事はなく唯々その後姿を見続けていた。

「……イワツ」

明らかに自分よりも強いポケモン、倒そうと思えば倒せた筈。だがそれをしなかった、縄張りを犯すつもりはないという事だと解釈したのかそのまま地面へと潜っていった。そして肝心のリヨウマ達は……

「うわああああん怖かったですよおおおっ!!もうだめかとおもいましたあああつつつ……!!」

「よしよし……でもお前がソニアの話を聞かなかったせいだからちゃんと反省しような」

「ごべんなざいいいいつつ……!!」

「ちやつちちゃんと反省してるなら気にしないからさ、ねっ!?ほ、ほらもう大丈夫だからさ!!」

「ドウドウ、大丈夫大丈夫」

「ファイ。ファイファイ」

安心した為か溢れ出た感情のままに泣きじゃくるユウリを宥める事だった。

第6話

「落ち着いたか」

「ぐ」迷惑っ……お掛けしました……」

大泣きしていたユウリも漸く落ち着きを取り戻す事が出来た、が今度は先程までの自分の事が恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にしなから顔を伏せてしまっている。

「自分で分かっているなら良い、だがお前さんは今回が初めての旅だ。だからこそ先輩の言葉には耳を傾けような」

「はいっ……」

消え入りそうな声、それだけ反省している——のもあるがそれ以上泣きじやくっている間ずっとリヨウマに抱き着いたままだったので其方の意味でも恥ずかしさが強い。リヨウマもそれを何となくだが理解しているので敢えてそれは追及しないでおく、彼女自身だつて忘れたい事なのは間違いだろう。

「あ、あのつりヨウマさんその……服っ……」

「服が如何かしたか」

「あくほらっユウリの涙とかで濡れまくってるわよ」

「ああそういう事」

この程度気にしないから忘れていいと返しておく、ポケモンの特訓をしていれば服が燃えたり濡れたりするのは最早当たり前前の事ではない。

「ユウリ気にしない」

「だ、だって……」

「女の子の涙で服が濡れる、寧ろ勲章」

「何でお前がそれ言うかなあ……まあ男冥利には尽きるわな、それに

——トウコにもよく濡らされたから慣れたもんだ」

えっ……?とユウリが顔を向けると何故か胸を張っている先輩がそこにはいる、言葉少なめでクールな印象を受ける彼女も自分と同じようにリヨウマの胸の中で泣いていたというのがいま信じられないがリヨウマ曰く、寧ろ旅が始まったばかりは泣きまくっていて困

らされた位だったらしい。少しだけ意外と思っているとそろそろ話を変えて欲しいだろうと気を利かせたソニアがエーフィについて話を変える。

「それにしてもリョウマの最初の相棒ってエーフィだったのね、その内見せるからって話してくれなかったけど……この子がエーフィ……」

「フィ」

そうよ私がリョウマの相棒よと胸を張るように得意げな顔を肩の上で作っているエーフィにソニアは興味深そうな顔を向けていた。イーブイから派生する進化ポケモンの一匹、エスパークタイプのエーフィ。イーブイ自体はガラル地方にも生息しているが矢張り生息数は少なく希少なポケモンとして有名。

「ほらっエーフィ、これから一緒に旅する二人に御挨拶だ」

「フィッ」

肩から降りると鼻を鳴らす、まるで二人を品定めするかのような仕草にソニアは思わず緊張してしまう。がユウリは緊張しない所かその美しい毛並みに見惚れてしまっていた。ビロードのような美しく艶のある毛並みに額の美しい紅玉、極めて気品があるように感じられる。しかしそんなエーフィはソニアには何処かそっぽを向き、ユウリを慰めるように手を舐める。

「フィッフィ〜フィ」

「こらエーフィ……悪い此奴ちよつと気難しいところあつてな」

「えっリョウマって今の意味分かるの？」

「当たり前。エーフィは私よりもずっとずっと長い」

リョウマが幼少の頃からの付き合い故に雰囲気や仕草で何を伝えたいのかは簡単に理解出来る、エスパークタイプなのでテレパシーのよくな物で意志を伝える事も出来るがそんな事する必要すらない程に互いに通じ合っている。

「ソニアはこれから期待、ユウリには頑張れだとき」

「ああはい、頑張ります……でいいのかしらこれって……」

「多分な……まあこのまま旅の注意事項とか説明しておくか」

エーファイには周囲警戒を頼むが、本人はえく？何で私がそんなことするのよつと言いたげな顔をしている。だがリヨウマが頼むよつと押すとしようがないわねつと僅かにツンデレっぽい仕草をしながらリヨウマの膝の上に乗りながら周囲警戒を始める。

エーファイは敏感かつ細かな体毛によつて空気の流れから天気や相手の行動を感じ取る事が出来るので警戒態勢さえ作ればこの状態でも十分に役目は果たしてくれる。まあ膝に乗ったのは完全にそうしたいからだろうが、ついでに触り心地の良い毛並みを撫でながら進行する。

「旅をする上で一番警戒すべきなのは野生のポケモン。彼らにも彼らなり生活スタイルがあるし縄張りなんかもある、それを荒らされたと思えば攻撃を仕掛けてくる。あのイワークみたいにな」

「えつりヨウマはあのイワークが縄張り主つて分かつてたの？」

「立派なイワークだったからな、多分あれは進化待ちの個体だな。進化の時期が近くてちよつと神経質になってたんだろうな、だから完全に戦意が無いつて分かつてたのに攻撃を仕掛けてきたんだろ」

「じゃあ、やつぱり私が悪かつたんだ……」

明確な理由があつて攻撃してきた、自分がいけなかつたんだと強く反省する。

「ポケモンつて言うのは俺達が思つている以上に賢いし強い。だから悔るつて事を一番しちやいけない、常に尊敬の心を忘れないようにな」

「尊敬……」

「ああつそうだ。例えばだ、俺とトウゴが旅の途中で見た事だが……コイキングつているよな、あの一番弱いポケモンとも言われるあのコイキング」

それにソニアは勿論、ユウリも頷いた。みずタイプなのに川の流れにさえ負けてしまう程に弱いポケモンとして世界的に有名、だが同時にその進化系であるギャラドスになるといふ事も有名。

「コイキングは進化の為にとある島の滝を昇つて行くんだ、並の水ポケモンでも大変な滝を幾つも」

「それって昇れるの？だってあのコイキングでしょ」

「思った、でも違った」

「ああ。コイキング達はその滝を次々と昇って行くんだ、中にはその年には無理でも次の年には昇るって奴も居るってコイキング調べてるウオッチャーのおっちゃんが言ってた。幾つかの滝をコイキングたちは必死に力強く昇っていく」

その話にソニアは思わずメモを取っていた。研究者としてもトレーナーとしても完全に意識から除外していたコイキングがそんな事をするなんて知らなかったから、そしてそこまでの力を持つなんて事も知らなかった。そしてユウリはポケモンの神秘を垣間見たような気分になり喉を鳴らしながら真剣に聞いていた。

「そして昇り切ったコイキング達はその日の夜、月明かりに照らされる中——ギヤラドスに進化していったんだ。弱いコイキング達は猛々しいギヤラドスになってコイキング達を連れて海へと帰る。また来年、進化する為に力を蓄えようとするコイキングと一緒にな」

これがポケモンの力強さ、そして賢さ。今は敵わない、出来ないのならば次の機会に備える為に力を付けようとする。それはこの世界に生きる全てのポケモンに共通する行動と言っても差し支えない。

「トレーナーにとって一番大切なのはポケモンを理解する事だ。それは野生でも手持ちでも同じだ、縄張りを持つなら爪痕とかで自分の存在を主張する。そしてそれは手持ちでも応用できる、例えば俺のイーファイだが……ちよつと素直じゃなくてな」

「フィッ!!フィィイツ……フィツ♪」

そんな事ないわよっ!!と大きく鳴くが直後に喉を指で摩られて気持ちよさげな声を漏らす。

「昔っから甘えん坊でな、常に自分を見て欲しい上にちよつと嫉妬深くてな」

「もしかして私達に挨拶してって事でちよつとご機嫌斜めだったって事……?」

「あるだろうな」

それを見てユウリはイーファイとの関係が羨ましかった。リヨウマ

はエーフィを、エーフィはリヨウマを心から理解しあっている。それは唯長い付き合いだからという訳ではなくそれだけ強い絆で結ばれている証明でもあるのである。自分もあんな風にダンテから貰ったポケモンと築けるだろうかと不安になるがトウコが肩を叩く。

「トウコちゃん……」

「まだ始まり、先は長い」

「——そうだよね、まだまだ私の旅はこれから……リヨウマさんこれからいろいろ教えて貰ってもいいですか!？」

「おう色々頼れ」

その言葉に瞳を輝かせながら漸く浮かべた笑顔のまま頭を下げた。そして同時に胸に暖かいものが灯る、助けて貰っただけではない。本当にこの人は尊敬出来る人なんだと思うとそれが熱くなってくる。もつと色んな事を学びたい、もつと色々知りたいと思つて改めてそれを口にする。

「私頑張ります!!」

新人トレーナー・ユウリ。彼女の冒険は此処から始まる。

第7話

「ヒバニー、ひのこ!!」

「ヒババツ!!」

ワイルドエリア駅からほど近く、うららか草原と名付けられているエリアで新人トレーナーのユウリはポケモンバトルに勤しむ事でポケモンとトレーナーとしてのレベル上げに努めていた。エリアボスとも言えるイワークとの邂逅で自分がまだまだであると同時にポケモンに対する様々な心が生まれ、強くなれば視線も気持ちも変わるのではと思いつつながらジムチャレンジに向けての力を蓄えようとしている。良い心掛けだと感心しつつもリョウマは素直に感心していた。

「ヒバニー来るよっ!!もう少しっ、よしでんこうせつかで後ろに回ってからどげり!」

「ヒババツヒイバアツ!!」

「ホツビツ!?ホビィィィイツツ!!?」

彼女が今戦っているのはホルビー。カロス地方にも生息しているノーマルタイプのポケモンだが、分類のあなほりポケモンが指し示すようにタイプの技を数多く修得する為、ダンテから最初のポケモンとして貰った炎タイプのヒバニーとは相性が悪い。

「ホオルビィィィイツツ!!」

「やっぱりあなでほるで来た!!ヒバニー落ち着いてね、耳を澄ませて。貴方なら絶対にホルビーの移動が聞き分けられる!」

「バニツ!!」

背後からの強襲を受けて大ダメージを受けたホルビー、起死回生の一手として得意とする技で攻めてきた。自身を高速回転させて耳をドリルのようにして掘り進むホルビーのスピードは地上の比ではない。自分の有利を押し付ける戦闘の鉄則を行うがユウリは焦らずにヒバニーを鼓舞しながら指示を出した。無暗に動かずに静止して相手の様子を観察している。

「来るっ絶対に来る……貴方なら絶対に」

「——……ヒバアツ!!」

「ホッホビッツ!!」

その言葉に応える!!と言わんばかりに跳び上がるヒバニー、その足元から凄いスピードで飛び出すホルビー。避けられた!?と驚くホルビーの動揺はそれを見ていたソニアですら見て取れた。同時にトウコも感心しつつライバルが強くなる事に少し笑う。

「今よつでんこうせつかで加速してからにどげりいいっ!!」

「ヒイバニツバアアニイッ!!!」

着地しながらバネに力をためて一気に跳躍してホルビーに渾身のキックを浴びせ掛ける。空中に勢いよく飛び出した隙を狙った見事な攻撃、そしてホルビーが地面に倒れこむと目を回しているを見てユウリは予備のモンスターボールを手にとってホルビーへと投げる。ボールから閃光が走りホルビーを内部へと吸い込んでいく、そして抵抗するかのような揺れが数回した後——ポオンツという特徴的な音と共にボールの揺れが収まった。

「やったあああつっ!!!ホルビーゲットオ!!やったねヒバニーっワイルドエリアで初のゲットだよっ!!私達のワイルドエリアの初めてだよ!!」

「バニツ!!ヒバビバツ!!」

「わ〜い!!」

ボールに駆け寄り、手に取ってボールを天に掲げながら喜びを全身で露わにする。初めてのポケモンゲット、という訳ではないが彼女にとってはこのこれで特別な一歩なのだからこれでいい。初めては起点、そこから大きくなるために大きな基なのだから。その喜びが強ければ次の一歩は強く大きくなっていく。

「ユウリ凄いいじゃない、さっきなんてホルビーに翻弄されてたのに」

「えへへっ〜あんなに潜った時に素早いなんて思いませんでしたから、対応しました!!」

「いや対応しましたって貴方……」

自慢気にヒバニーと共に胸を張る彼女にソニアは思わず言葉がなくなる。ホルビーとのバトルはまだ2度目、最初なんてノーマルタipesのホルビーが豊富な地面タイプで攻めてくる事に驚いていた少

女があつという間にホルビーの強みを完全に把握して立ち回っていた事に驚きしか沸き上がらなかった。

「さっきの如何でした？中々でしたよね!？」

「上出来だがあそこでホルビーが反撃に転じる事も考えられたからひのこが正解だな。戦闘経験が高い奴ならあそこからマツドシヨットでヒバニーを撃ち落としかかるだろう」

「ええっマジですか!!?ヒヤツゝ凄いねヒバニー」

「ヒバツ……」

自分の強さを認められずに言外に相手が弱かったからと言われたのに反感を持たずにその言葉に驚きと尊敬を浮かべるユウリとヒバニー、そんな様子の二人にリヨウマは笑顔を作る。

「と言つても今のレベルのお前達なら上等上等。にしてもヒバニーか……ウサギポケモンらしくキック力が自慢つて訳だな」

「はいっ!!ダンデさんから貰った時も凄い元気で彼方此方走り回って飛び跳ねちゃう位の元気っ子です!!」

「そのキック力を生かしたフットワーク重視もいいが、一撃重視の技を覚えさせて特色を持たせるのもいいかもな」

「強烈なキック、一撃の蹴りで相手を倒す……カッコいい!!ねっヒバニー絶対じゃええようよ!!」

「ヒバヒババツ!!ヒイバアアア!!」

「何だ何だ俺にそう言うワザを教えろってか？」

話を聞いて益々強くなったヒバニーを想像してワクワクするユウリとそんな自分を考えて居ても立っても居られないのかりヨウマに教えてくれとせがむヒバニー。とてもお似合いのコンビだと言わざるを得ない。

「ユウリ、超才能」

「うんっ私も見えて凄いつて思う……」

そんな光景を見つつトウコはそんな事を言うソニアもそれに同調するがそんな簡単な事ではない、とトウコはある事を聞く。

「問い。ユウリは本当に新人？」

「えっ?ええっ本ただけど、でもダンデ君とかのバトル映像は凄い見

てたらしいからそれも関係してるのかしら」

「してる……とは思う」

見て覚えた、という部分はあるだろう。しかし、それで身に付けば皆が皆ジムリーダークラスのトレーナーになっている。ダンデはこの地方のチャンピオンだと聞いているがそのバトルを見ただけで技術は身に付かない。最高クラスのトレーナーとはレベル差があり過ぎるし個人によって合わないの問題もある。ならば彼女自身のバトルセンスが半端ではない事になる。

「ワザの応用を組み込むまでが速い」

「応用って……もしかしてでんこうせっかで避けたあれ？」

「うん。基本は攻撃がメイン、だけどユウリはそれを移動と回避、そしてコンビネーションとして使った」

ワザ一つ一つが持つ特性やら特徴などから一つを抽出して使うというのは熟練トレーナーが主に使う手。でんこうせっかの場合は瞬間的に起こすスピード、ユウリはそれを回避に使いながらも最後には勢いをつける為に使いにどげりの威力は飛躍的に上昇していた。

「ポケモンの特徴とワザの性質への理解、ハイレベル」

「じゃあユウリって……」

「超天才、凄い速度で成長するのは確実」

紛れもない天才。新人トレーナーという括りの中でユウリは頭一つ、いや頭三つは飛び抜けている程のセンスを持っている。

「取り敢えずはこのまま次の街に向かおう、適宜バトルするかしないかはお前に任せる。但しエリアボスは手に負えないだろうから突っ込むなよ」

「はい分かりました先生!!」

「……先生? いや先生って何よ」

突然の先生呼びに困惑するが満面の笑みと尊敬の煌きを帯びた瞳をヒバニーと共に向けてくるので思わずたじろいでしまう。そしてユウリは大きく頭を下げる。

「リョウマさん、いえリョウマ先生!! 私先生みたいにポケモンと凄いい絆で結ばれてるトレーナーになりたいんですっ!! 私を助けてくれた

時のエーフィとのやり取りは信頼に満ちてたしコイキングの話をしてくれてた時もエーフィは先生の言葉に応えようとしてました!!それって先生もエーフィに応えようとしてたって事だと思っくんです!!だからお願いですっ私の先生になって下さい!!きつと私がジムチャレンジで前に行く為には必要だと思っくんです!!」

「ヒバツ!!ヒバババツ!!」

頭を下げるユウリの隣では土下座のつもりなのかヒバニーが座りながら頭を地面に付くように下げている。ヒバニーの方は先程エーフィと顔合わせをさせた時にレベルの違いを感じ取り、その主である自分にも憧れているという事だろうか……しかしまさかトレーナーとポケモンから此処まで熱意を向けられるのは完全な想定外である。反応に困っているのとトウゴがやって来る、きつと説得してくれるのだろうか……と思っくんしているとユウリの肩に手をやる。

「これからは私が姉弟子、頼って良い」

「はいっトウゴ先輩!!」

「そつちかよっ!!?というかテメエは何時から俺の弟子になったあ!!?」

まさかの肯定派だった。しかも心なしか目が輝いているし先輩と呼ばれて優越感に浸っている感じがある、そう言う欲求があったのだろうか……と呆れているとソニアが優しく背中を摩る。

「まあ私としては受けてあげて欲しいかなあ……新人トレーナーってこういう自然の怖さとか良く分からずに怪我とかしちゃって引退しちゃう子も多いのよ。だから確りとしたトレーナーの下で学べる機会があるなら学んだ方が良くないかなって私は思っくんかな」

「ええっ……それこそトレーナーズスクールの仕事だろ……」

「私もフォローするから。ねっお願い」

「ハアッ……あくあく分かった、分かりましたよ面倒見りゃいいんでしょつたく」

ソニアの言にも一理あるし自分としても此処までのセンスを持つ少女が何処まで行くのかというのは強い興味がそそられる。師匠と弟子という責任が伴う関係になってしまった事だけが面倒ではあるが……まあ先輩トレーナーとして面倒は見てもやろうと思っくんにした。

「有難う御座います先生!!いや師匠!!」

「師匠はやめろ」

「先生で決定、リヨウ先生」

「リヨウマ先生これからお願いします!!」

「もうそれでいいや……何か飲みたくなってきた……」

「アハハハツ……エンジンシティについたら付き合おうから」

第8話

「エンジンシティ到着う〜!!」

自然豊かなワイルドエリアを越えて長い階段を越えた先に到達した街、それこそエンジンシティ。田舎のような穏やかな自然と調和した街並みから一転、ブラックシティとは違った意味で発展した街だった。工業が発展した都市とでも言うべきなのだろうか、自然の多かったブラッシータウンから大自然そのもののワイルドエリアからの落差が凄いが兎に角到着した事にハイテンションなユウリに続くようにトウコも声を上げる。

「元氣だねえ……」

「弟子二人は元氣なのにその師匠は酷いローテンションね」

「当たり前でしょうが……」

なし崩し的に弟子入りしてしまったユウリ、それを否定する事も無く先輩姉弟子となれた事が嬉しいのか一方的に容認したトウコのせいで自分に押し掛かってくる責任の重さは一気に倍々になってくるのだから。

「唯の旅のお供じゃなくて弟子だぞ、つまり指導やら導かないとあかんだよ俺が……自分で歩け自分の道位」

「まあまあ……今日の夜は飲むの付き合うからさっねっ?」

「ったく……タバコ吸いてえな」

こんな時にはタバコが良いというので是非とも吸いたい、それでこの胸に詰まっている溜息と憂鬱な気分を発散できるのならば是非ともしたい所。

「あれっタバコ吸うの?」

「吸わんよ。子供が要るんだから吸わん」

「へえっ……」

面倒だ何だと言いながらも結局の所、同行するユウリとトウコの健康を案じている。言動こそあれだが本当は心優しいんだなと見直しながらもユウリとトウコに腕を引っ張れるリョウマを見ながら追いかける。

「さあさあ先生っ!!早くスタジオムで受け付け済ませちやいましょう!!」

「リヨウ、行く」

「ハイハイ……」

「なんか、仕事で疲れてる休日のお父さんみたいよ」

「やめてくれ」

気分が暗い中、ほぼ強制的に連れて行かれていくジムチャレンジのスタート地点であるエンジンスタジアム。此処もジムチャレンジの舞台にはなるのだが順番的には此処は3番目に当たるとの事。だが立地的に中心に当たるので此処がスタートになるらしい、そんな事をパンフレットを読んでいるトウゴが解説しながらもスタジアムに到着すると先についていたホップが駆け寄ってきた。

「おっ来たなユウリ!!それにしても凄いやなジムチャレンジじゃっばかりだぞ!」

「いやあ本当だよねえ……まあ私達もその中に入る訳だしきにいてもしょうがないよ、兎に角登録登録!」

「おっユウリにしてはやる気満々だな!!」

「私にしてはってどういうこと!!?」

弟子入り云々を知らないために何でユウリのテンションが高いのか分からないホップ。だがそれはそれでモチベーションが高くていいぞ!!と褒める心を忘れない、早速皆で受付に向かって行く。

「ジムチャレンジ参加者ですか?でしたら推薦状の提出をお願いします」

「はいっ!!」

と二人揃って推薦状を出す、そしてそれを確認する時にスタッフは驚きながら二人の顔を見る。

「えええっ!?チャッチャンピオンのダンデさんの推薦状ですか!?しかも二人とも……一体何者なんですか御二人とも」

「俺はホップ!!ダンデの弟で将来のチャンピオンだぞ!!」

「なんとチャンピオンの弟さん!?これは驚いた、こりゃ今年のチャレンジは盛り上がりそうですね!!では其方のお嬢さんは……」

ダンデの弟ならばある意味この推薦も納得だとスタッフはならばユウリは?と聞こうとするのだが、ユウリはトウコとリョウマを引張って来ていた。

「ほらほら先生と先輩も!!」

「はいはいっ……すいません、俺達二人でこの推薦状をお願いします」
「えっ嗚呼はい、えっと確認させて頂きますね」

如何にも覇気がない二人だなあ……と思いつつも推薦状を確認する。流石にチャンピオンほど驚きはしないだろうと高を括っていたら……思わず大声を上げて驚愕してしまい一気に注目を浴びる事になる。

「ホツホウエン地方の新旧Wチャンピオンの推薦状!!お、お二方一体何者なんですか!!?ガラルチャンピオンのダンデさんの推薦状が来たと思つたらまたとんでもないビックネームが来るじゃないですか!」
「これはミクリの姪ですから。まあ俺は別ですけど」
「ブイッ」

「いやいやいや別なら猶更とんでもないんですけど!」

兎も角受付は出来るとの事で慌てながらやってくれるのだが……如何にも大騒ぎしてくれたおかげで要らない注目を集めすぎてしまった感が強い。と言つてもこの地方のジム巡りは地方を上げての興行のそれなので何れバレる事と思うべきなのだろう。そのまま背番号の登録まで順調に進み、ユニフォームの発注も無事に終了。翌日の開会式に合わせて受け取れるとの事。

「それでは翌日の開会式まではホテル・スポミーインまでご宿泊ください。チャレンジなさる方は無料でお泊りになられるのでご安心ください」

「無料なのか、随分と好待遇だな」

「んじゃ先生行きましようよ!!」

「何だ何だユウリ、リョウの事を先生って呼んでるのか?」

「ふふんっ私は先生に弟子入りにして既にホップの預かり知らぬ所まで成長しているのだ……」

「何をく!?じゃあバトルで確かめるぞ!!いったんワイルドエリアで勝

負だ!!」

「望む所〜!!」

と元気よくはしゃぐかのようにスタジアムを飛び出していくユウリとホップ。それを見て益々リヨウマは溜息を深くする。

「まだ何も教えてねえだろうが……おいトウコ」

「何」

「お前先輩面する気あるなら少しは面倒みてやれ、お前姉弟子だろ。なんかあつたら連絡しろ」

「姉弟子……そうだった、うん後輩の妹弟子は私が見る」

目を輝かせながらその後を追いかけて行くトウコ、遠回しにユウリの世話をぶん投げただけだが……勝手に弟子入り云々を言い出したのだからこの位は許して貰おう。それにトウコは3年という年月を自分と共に旅で成長したトレーナーだ、何かあつても対処出来るだけの実力と相棒たちがいる。

「ハアツ……さてと飯でも食い行くかソニア、奢るぞ」

「えついいの?三人の事もだけど」

「いいんだよ、トウコはトウコで3年旅の経験があるしあいつはあいつで強い。それに俺の気分転換に付き合わせるんだこの位はするのが当然だ」

「んじゃ……お言葉に甘えて……」

「さてと何処かい店ないかねえ……と」

——それ、私も付き合っちゃいけないかしら?

スタジアムから離れるように歩き始めた時に後ろから声が掛けられた。振り返るとそこには褐色肌が健康的でスラリと足が長くピッチリと決まっているズボンが決まっている。何処かチョンチーを思わせるようなライトイエローなサングラスを上げつつウインクをする笑顔も魅惑的、それを見たソニアは声を出しそうになるを抑えつつも咳払いをしつつ軽く手を上げる。

「久しぶりねソニア、貴方が此処にいるなんて珍しいわね。新人さんの付き添い?」

「そんな所つまあ私も研究の練り直しみたいな感じ」

「ふうん大変ね、それでそちらの素敵な殿方をぜひ私に紹介してくれるかしら？」

サングラスの奥から覗かせる瞳は何処か鋭く興味を惹かれているかのように真っ直ぐとリヨウマを見据え続けている。

「水タイプの使い手にしてホウエン地方のチャンピオンのミクリさん、そして旧チャンピオンのダイゴさん……そんな人達の推薦状を受けられる人なんて気になっちゃうわ」

「あつそつか……確かにそうよね」

「まあ自己紹介は自分でするさ。リヨウマだ、ミクリさんから姪っ子の面倒を見て欲しいって頼まれた唯のトレーナーだよ」

「2番目のジムチャレンジ、バウタウンのジムリーダーを務めてるルリナよ」

にこやかな笑みと共に明かされた正体に僅かに驚く、まさか唐突に出会った人物がジムリーダーだったとは……まあ過去にイツシュで木の上から降ってきたジムリーダーや崖の上から飛び降りてきたチャンピオンという前例がある為かそこまで驚かないが……。

「姪っ子さんの面倒を任されてるってそんなに信頼されてる、そしてダイゴさんにも実力が保証されている——つまり唯のトレーナーではないって事よ」

「流石にこれ以上は此処で話す気はないかな……この街で美味しい飯と酒がやれる店を知らないかい、そこで色々と晴らしたいんだ」

「ええついい所に連れてって上げるわ。そこで色々と私も話を聞きたいしね♪」

そう言うのと慣れたようにリヨウマの手へと自らの手を絡ませるとそのまま優しく先導していく、リヨウマはそりゃいいなと言いつつそれに続くがソニアは思わずルリナの行動に僅かにフリーズしてしまつて少し遅れながら後に続いた。

「リヨウマさんってお酒イケる口なのかしら？」

「飲むときは飲むな。ソニアは行けるのか？」

「私はまあ少し強い位かしら」

「良いわね、久しぶりに美味しいお酒が飲めそうじゃない」

第9話

「しかしっ実に美味かったな、流石はジムリーダーのご紹介店だ」
「ハウエン地方のチャンピオンの推薦者よ、変なお店に連れて行く訳には行かないからね」

ルリナの紹介してくれた店は正しく超一流の店。モデルとしても活躍している彼女は様々な意味で顔が広い、こういった名店などにも顔が利くし耳も早い。その味の良さにリヨウマも大満足し気分もすっきり良くなっていった。対してソニアはやや顔を青くしていた。

「でもここって結構な高級店よね、お金足りるかな……」

「俺が出すから大丈夫だ、此処を紹介してくれたルリナさんの分も出させてくれ」

「あらっ私は良いのよ、これでも結構稼いでるんだから」

「元々俺の気分転換の為なんだ、俺の我儘に付き合っただけで貰ってるに等しい。だったら俺が誠意を見せるべきだろう」

ウインク混じりにそう答えると少しだけ微笑みながらそれなら甘えちやおうかしらと言いながら水を一口飲む。高台にあるエンジンシティ、そんな街の高級店故か高所にあり景色も抜群。ワイルドエリアも一望出来る、黄昏時が酷く映える景色に気分がいい。酒も入っているからカリヨウマの顔は赤いが口調はハッキリしているし酔っている様子は一切無い。

「リヨウマさんはハウエン地方出身なんですってね、ミクリさんと交友がありましたのはそれで？」

「リヨウでいいよ、ソニアにはそう呼ばれてる」

「そう、それじゃあ私もルリナで良いわよ」

互いに微笑みながらまだ残っているワインを注ぎながらグラスを小さく鳴らして飲む。そこまで酒に強いわけではないソニアからしたらこの二人の酒の強さは別次元のように思えてしまう。逆に言えばリヨウマの場合はそれだけストレスを発散をしたかったのだろうか。

「まあ出身ってのもあるだろうな……だけどそれだけじゃなくて俺が

コーディネーターとしても一時期コンテストをやってたからだろうな」

「コーディネーター？」

「ポケモンの魅力を競い合うポケモンコンテスト、ポケモンがコンテストで輝けるようにコーディネーターする人の事よ。ガラルだとまだまだ根付いてないけど私は知ってるわ」

酒の勢いもあるからかりヨウマはその話へと足を踏み入れる事にした、その程度ならば問題ないのかそれとも……彼の中ではそれなりの線引きが出来ているのかは分からない。

「ミクリさんはチャンピオンだが同時にコーディネーターとしての最高峰、トップコーディネーターでもある。そして同時に自身がコンテストを主催する事もある……それで俺がそのコンテストで優勝した事もあって面識が出来てね」

「凄い、リョウウってトレーナーだけじゃなくてそんな事まで出来るの？」

「俺は何もしてないさ、唯どうやったらポケモンが楽しく元気に出来るかを知ってるだけでそれをやっただけだよ」

そう言いながらワインを口にするリョウマ。だがそれこそがコンテストで優勝した原動力なのだろうと理解するルリナ、ポケモンが楽しそうに元気である姿は誰だって魅了される。可愛いポケモンが、カッコいいポケモンが、美しく、賢く、逞しいポケモンたちがそんな風に振る舞う姿は何より魅力的だとモデルである彼女は理解する。

——いいなあミクリカップのリボンつつ!!こ、今度は私がそれを手に入れるんだから、負けないんだからあ!!

——できるよ、今回は絶対にあれだよ……ビギナーズラックって奴。

——……運で負けたと思うとなんかやりきれないんだけど。

「っ……」

「でも私はちよつと尊敬しちゃうわ」

「えっ」

頭痛を覚える、嫌悪感を覚えそうになった時、ルリナが素直な感想を口にした。

「モデルをやっていると如何すれば魅力を引き出せばいいのか分かってくるのよ、だけどそれって本当に大変なの。人の魅力って中々現れない物よ、ポケモンも同じ。長所を伸ばせばいいのか、それとも短所を補うのか、それで本当に魅力的になるのかってなるの。でも本当に魅力的なのは元気で楽しそうな姿って私が思ってるのよ、だから仕事を楽しもうとしてるから素直に私はリヨウの事凄いつて思うわ」

笑みを作りながらそつと左手に手を重ねながらルリナは言う。

「それは貴方の明確な力で美徳ね、誰かを育てる点において素晴らしい魅力だと思うわ」

「育てる魅力か……そく言えばどつかの小娘が勝手に弟子入りして連れが弟子自称しやがったんだよなあ」

それを受けて少しだけ笑いながら外へと視線を逃がしながらも何処か愉しそうな様子を作った。気分が良くなったからだけでは、ルリナの言葉が自分の中にある何かを中和し前に進めてくれた。

「ならっお弟子さんを魅力的に育てればいいだよ、元気なポケモンと一緒に駆け回るようなトレーナーに」

「出来ると思うかい？」

「思うわ、会って直ぐの私でもそう思えるほどの魅力的な殿方なんですからね」

「やれやれっ美人に言われたら俺は弱いんだよね、しようがない……少しは真面目に師匠やりますか」

その言葉はソニアにとつては胸を撫で下ろす所があった。何故ならば余りにもリヨウマのモチベーションが低かったので適当な事しか教えてあげないのではないだろうかという不安が少なからずあった。ユウリとは顔見知りだし出来る事ならば立派なトレーナーとなつて欲しいと思つている、だからリヨウマの弟子入りというのは喜ばしい事だった。それが今前向きになったのだから安心出来る事この上ない。

「いい店紹介してくれてありがとうルリナ、お陰でいい気分転換に

なった」

「どういたしまして。此方こそ奢って貰ってご馳走様」

「この位軽い軽い」

「いや、凄い値段だったと思うけど……」

店を出ながら身体を伸ばすリヨウマと微笑むルリナ、だがソニア自身は食事の代金が思っていた以上の物で目を丸くしていた。25万、それが今回の三人分の食事代である。それをサラツと電子決済で会計してしまったりリヨウマにも驚かされた。

「リヨウ……もしかして結構お金持ちなの？」

「それなりに。伊達に3年も一緒に小娘連れて旅してないって事よ」

「なあにソニア、リヨウが良い男でお金持ちだからって狙っちゃう気？」

「ちちちちちちっ違うってばあ!」

ニヤついたルリナのそれに顔を真っ赤にして否定する、明らかにからかい目的のそれだが思わず大きなリアクションをしてしまった。これではルリナの思うつぼではないかと思っているとクスクスと笑いながら冗談よと断る。

「さてっ今日はいい話を聞けて楽しかったわ。今度はコンテストの話も詳しく聞けたら幸せね」

「美人の頼みなら喜んで、今度は二人つきりを御所望かなレディ」

「フツツそれも良いわね、是非綺麗な夜景を見ながらが良いかしら」

「ちよっちよっつとルリナ!」

何かグイグイと押し迫るかのような姿に何やら不思議と危機感を感じてしまうが、一瞬意地の悪い笑みとなった事からまたからかわれた!!と気づく。

「それじゃあおやすみなさい、また明日の開会式で会いましょう」

投げキッスをしながらそのまま去っていくルリナを見送るリヨウマとソニア。流石モデルと言うべきだろう、様になっているし去る姿までもが美しく魅力的だ。このガラルでポケモンコンテストを流行らせてみるのもいいかもしれないと思うリヨウマだが、直ぐにソニアに手を差し伸べる。

「では俺達もホテルに向かおうか、お手は必要なレディ」

「……いる」

何処か拗ねたような顔をしながらもその手を取りながら共にホテルへと向かって行く。黄昏時だった空は更に暗くなっていき夜が迫り始めていた、街灯の灯りが街中を照らし始める中エンジンシティの入り口近く通りかかろうとした時、ワイルドエリアから上がってきたユウリ達と偶然出くわした。

「あっ師匠!!」

「おいおいおいお前さん達こんな時間までバトルしてたのか?」

「いやあバトルはもつと前に終わったけど腹減っちゃったら一緒にカレー作ってたぞ!」

「アップルカレー美味、イエイエイエ」

第10話

ルリナとの食事を終えてホテルへと向かおうとした所でトウコたちと合流したので一緒にホテル・スポミーインへと戻る事になったリヨウマ。ジムチャレンジをするだけでホテルに無料でご招待とは酷く気前がいい。

「しかし私の分まで無料になるなんて本当に気前が良いわねローズ委員長、ポケモンセンターの方に行こうと思ってたのに」

「あれっそうなんですか？」

「そりやそうよ、私はジムチャレンジには参加しないのよ？ だけど御引率の方ならばOKですって許可下りちゃったからびっくりよ」

肩を竦めるソニアは何処か何か狙いがあるのではないだろうかと軽く勘ぐっている、以前確かにチャレンジには参加したがそれつきり。恐らくハウエンの新旧Wチャンピオンの推薦者と一緒だからという事だろう、少しでも二人の心象でも良くするための策……まあ問題はないだろうと受け入れる事にしながらホテルへと到着する。すると入って直ぐに黄金の像に出迎えられた。

「おおっ！ 金ぴかの像だ!!」

「ああそうか、此処にも像があるんだったね。これもガラルの伝説に関連してるかもだから調べようと思ってたんだ」

「この像が、ですか？」

ソニア曰く、遙か昔にガラル地方を襲った厄災とされるブラックナイトからガラルを救ったとされる英雄の像。巨大な黒い渦、ブラックナイトが現れ、それにより各地で巨大なポケモンが暴れるという現象が起こった。それを剣と盾を持った鎮めたとされている。

「へえっ〜って事はその剣と盾持った英雄って兄貴みたいに強いつて事なんだな」

「まあ強いのは確かだと思う、でも昔の事過ぎて詳細な事が歯抜け状態なんだよね。その事を改めて調べ直すのが私の旅の理由って訳、何か解ったらその都度解説してあげるわよ。歴史の勉強もトレーナーとしての教養を深めるには良いと思うから」

「歴史の勉強もトレーナーの鍛錬の一つ……メモメモ……」

「なんか急に真面目になってないかユウリ？」

こんな感じだったっけ？と言いたげな顔をするホツプだがそれだけユウリは変わっているという事なのである、同時にリョウマとトウコは興味深そうな顔でその話を聞いていた為かソニアとしては興味を持ってくれて少し嬉しそうだった。

「二人はどう思う、やっぱりただの伝承だと思う？」

「いやこう言うのは馬鹿にならないからな、特にポケモンが関わると」
「全く。伝説のポケモンが伝承になるなんてザラにある」

ホウエン地方における伝説のポケモン、大地の化身グランドンと海の化身カイオーガ。イツシユの伝説のポケモン、真実の英雄レシラムと理想の英雄ゼクローム。この双方も伝承や伝説の中で語り続けられてきたポケモンだが確りと実在しその力を求める者達も存在したほどだ。

「えっ何々他の地方の伝説のポケモンについて知ってるの!?!ちよっと教えてくれない!?!」

「取り敢えずチエツクインだけはしようぜ、お前さん酒がまだ残ってるだろ。その勢いだと危険だぞ」

「う」っ……………」

一先ずチエツクインを済ませようとカウンターへと足を差し向けるのだが……何やらそこは酷く騒がしかった。そこではブブゼラや少女がプリントされているタオルを掲げながら顔にペイントまでしたかなり気合の入ったサポーターのような集団がチエツクインの邪魔をしている。

「おいアンタら何騒いでんだ、近所迷惑だ」

「迷惑とは何事だ!!我々はジムチャレンジャー応援の為に此処までやって来た、エール団の目的を邪魔するのであればポケモン勝負です!!」

「いやなんでだよ」

と思わず素でリョウマが突っ込んだ。此方としては酒も入っているし時間も時間なので明日の備えたいのだが……周囲には他のジムチャレンジャーもいてチエツクインが出来ずに迷惑しているのが伺

える。

「なんだか良く分かんないけど勝負なら俺が相手になるぞ!!」

「私だって!! 師匠見ててくださいい私強くなりましたから!!」

「待て待てホップにユウリ、こんな所でバトルしてみろホテルに迷惑が掛かるだけだぞ」

「あつ……」

しまったつと言いたげにボールに伸びる手が止まる。ポケモンの力というのは非常に強い、例えば小さなポケモンでもやろうと思えば建物の一部を壊すなんて簡単に出来てしまう。故にポケモンバトルは専用の屋内か屋外が好ましい、そして話から察する事が出来たがこの面子は如何も特定のチャレンジャーのサポーター……だとしたらミクリの苦勞も知っている身としては黙っては置けない。

「まあ落ち着けエール団とやら。察するにお前さんらは特定のチャレンジャーのサポーターだろ」

「そうである!!」

「だったら逆にお前さんの行動がその子に迷惑になる事も考えてやれ」

「全くだよね」

トウコもそれに続く。彼女も彼女で叔父であるミクリの苦勞は良く知っている。

「応援するのは好ましい、される側は心強い。でも度が過ぎると逆にされる側に迷惑が掛かる」

「迷惑行為をするお前さんらに応援されるっただけでアンチが付くぞ」

『……ハツ!!?』

その言葉にハツとしたのか、エール団はまるでかみなりにでも撃たれたかのような衝撃を受けたような顔になった。

「そ、そうだ……エールとは誰かへと送る声援であり邪魔などではない……」

「我々がこんな事をすればするほどにエールが逆の方向へ……」

「それはサポーターの基本中の基本なのに、我々と来たら……!!」

「あああああつ……」

と慟哭の声を上げながらその場に膝をついて嘆き始めるエール団に周囲からはおおつ……という声が漏れた。

「な、なんか実感籠ってるわね……何か経験あるの？」

「過激なファンがコンテストの相手に迷惑行為を働いて体調崩しちまってる……ミクリさんが責任取ってコンテスト辞退する羽目になっちゃったんだ」

「そうしないと相手のファンも納得しなかった」

「うつわあつ……」

この地方のジムもリーグ分けされていてしのぎを削っている為にそのような話を聞いた事もあるが、矢張り過激なファンというのは面倒なんだなど実感する。そんなん時エール団はカウンターから退きながらその場の全員に頭を下げた。

『申し訳ありませんでしたっ!!』

「分かればいい、これからはマナーを守ればいい。そうすれば応援する側の株も上がる」

「そうそう。ゴミ掃除とか簡単な所からやるだけでも評判あがるぞ」

とアドバイスを送っている時の事――

「皆何しよーと?」

『マツマリイ!?!』

少女の声に大きく反応するエール団。エール団の持っているタオルにプリントされている少女がいた、剃りこみの入った黒髪ツインテールが特徴的なユウリと同じ位の歳の少女、名前をマリイ。

「もしかして迷惑を掛ける事をしよーと?」

「はっはい……ですが、我々は改心いたしました!!」

「これからは善良なサポーター、ジムチャレンジをする皆を応援しながら特にマリイを応援するエール団としてリニューアル!!」

「その為に――」

『早速行動〜!!』

最後にもう一度頭を下げてからホテルから飛び出していくエール団御一行に目をパチクリさせて驚いているマリイ、何があったのか分

からないが彼女としてはまたエール団が何か迷惑を掛けてしまったのでは、と察してリヨウマたちの方へと向かって挨拶をしつつ頭を下げる。

「えっと良く分からないけどエール団が迷惑かけてしまったみたいでごめんね、あたしの応援団んだけど……地元からチャレンジャー出るのが珍しいから何だか凄い気合入っちゃってるみたいで」

「見れば分かる」

「まあ考え改めてくれたみたいだから気にするな、それにしても心強いじゃないか応援団なんてさ」

迷惑を掛けてしまった事を謝ろうと思っていたのにそんな事をしなくていいと返したどころか、エール団の存在の事を肯定されてマリイは少々驚いていた。

「もうファンがいるなんて凄いな!!まあ俺には母ちゃんって言う最強のファンがいるけどな!!」

「それなら私だってそうだよ、それに師匠も先輩もいるし断然私の方が上!!」

「何をっ俺の方が上だぞ!!」

「私!!」

「俺だ!!」

と何方の方が凄いかで軽い口喧嘩を始めてしまう二人にマリイは何処か微笑ましそうな笑みを浮かべた。

「仲よかばいなあ」

「喧嘩するほど仲が良かったら奴ばい、気にしえんでくれ」

「あれっもしかして……ホウエン地方出身と?」

と同じ方言を口にした事で接点が生まれたリヨウマとマリイ。その後少し方言混じりの会話をした後自己紹介に移る事になった。

「あたしはマリイっていうの、宜しゅう」

「リヨウマだ。好きな風に呼んでくれ、こっちはトウコ」

「トウコ、宜しく」

「うんっこっちこそ宜しく」

第11話

「似合ってるな、馬子にも衣裳って奴か」
「ブイッ」

更衣室を出たリヨウマ、そこで遭遇するのは同じようにユニフォームを纏っているトウコの姿。エール団の騒ぎの翌日、気分良くホテルを出た一同は開会式が行われるスタジアムへと向かう事になった。そこでお願いしていたユニフォームを受け取ると早速それに着替える事にした。白がメインなユニフォームなせい、ジムチャレンジャーばかりいるこの場所が眩しく思えるのは気のせいではない。

「師匠も似合ってますよ、私は如何ですか」
「まあ似合ってるじゃね」

「何で私は適当なんですか……」

「ならガチで褒めようか？」

「お願いします!!」

と合流してきたユウリが見せびらかすようにターンするのだが、塩対応に抗議されるのでいっちょ本気で褒める事にした。

「白を基調としている為に基本的には誰にも似合う、だが白いというのは個人の特色というの良く表すには良い色なんだ。その白色にユウリの元気さと可憐さが良く映えている。今のターンと微笑みも中々に美少女を引き立てるには絶好のチャームポイントだしこれは間違いなくファンが大勢こと間違いなしちよつと自信あげな表情がまた良いな、笑顔で活発そうな美少女って奴は男が放っておかないぞ」

「あのっすいません師匠もうやめてっ……」

真つ赤になった顔を隠しながらギブアップするユウリ、此処までベタ褒めされた事なんて家族でもされなかつた。故に慣れていなかつたのかも耐えきれませんと言いたげなポーズを取っている。

「何だまだ言えるぞ」

「いえもう……結構です……生意気言ってますいませんでした……」

「ユウリに勝利、幸先良いなりヨウ！」

「前哨戦に勝利でゴーサインってか」

そう言いながら背中
の背番号を見せ付ける、リヨウの番号は531。少々無理がある語呂合わせだがこれで531とするつもりらしい。
ゴーサイン

「おつ〜!!それでゴーサインなのか!!いいなあそれ、俺は189で飛躍ってしたぞー!」

「いい掛け方だな、でユウリは……228?」

「特に何も考えず誕生日にしたらしい。あたしは960で黒」

と一緒
にいたマリイが照れ続けているユウリの背中をさすりながらもその意図を話す。本人曰くホップやマリイのを聞いてもうちよつと考えて決めればよかった……と後悔気味らしい。

「それでトウゴは……666?それってなんか込めとーと?」

「大したのではない。この数字に意味がある」

胸を張りながら番号を自慢する。666、その数字には悪魔の数字という意味が込められており、怪物や悪魔などを指す事になるのだが……。

「何でお前その数字……?」

「私は飲み込む、その先にあるものを。全て私の糧にする」

鋭く頼もしい表情をするトウゴ、この数字にしたのは敢えてこれを背負う事でそれが秘める悪しき力さえも飲み込んで自分の物にして前に進むという覚悟を込めたとの事。立ちはだかる物を全て踏み越えて、障害を力に変えてその先へと進んでいく。

「お〜!!トウゴ、なんか凄いカッコいいぞ!!」

「アタシも負けないようにしないとっ……ユウリもたいがい立ち直りな」

「ううううううっ……」

「ちよつとやり過ぎたか、でもユウリお前活躍するんだったらマスコミやらファンに同じ事されんだから今のうちに慣れとけ」

「師匠があんな真顔で褒めるからですううう……」

「リヨウ、私にも」

「あ〜うん魅力的魅力的」

一先ず揃って開会式へと望んでいく。他の地方でのリーグで慣れているつもりだったが、ある種興行としては此方の方が熱量は上だった、足を踏み入れた瞬間からスコールのような大歓声が響き渡りチャレンジヤーの背中を押す大声援、それに困惑するか緊張するか、力に変えられるかはそれぞれ次第だがもう既に戦いは始まっているのだと思ひ知らされる。

『私、リーグ委員長のローズと言います。皆さま、長らくおまたせしました!!そして今年もこの季節がやって参りました!!このガラル地方で年に一度の祭典、ジムチャレンジ!!いよいよ開催です!!』

マイクへと向けて語りながらスタジアムの巨大モニターにて姿が映し出されるガラル地方のリーグ委員長、ローズ。見た目は優し気なジェントルマンと言った様相だが手慣れた様子で進行をしていく。そしてその言葉は遂にジムチャレンジヤーの前に立ち塞がる強敵、ジムリーダーの紹介へと移った。焚かれるスモークの奥、当てられるスポットライトの光に導かれるのではなく、自分の足で確りと進んでくるオーラ、あれがジムリーダー。

『ファイティングファーマー!草タイプ使いのヤロー!!』

優し気な笑みとは裏腹にがっしりとした体格に太く逞しい腕とにガツチリとした足腰の男、如何にも農家ですと言わんばかりのスタイル。草タイプ使いのヤロー。

『レイジングウェーブ!水タイプ使いのルリナ!!』

スラリとした長い脚とスタイルの良いボディライン、褐色の肌が眩しく光が映えている。魅力的な外見だけではなく実力も素晴らしい水タイプ使いのルリナ。歩きながらもリョウマを見つけると投げキッス、リョウマそれを笑みで受ける。

『いつまでも燃える漢!炎のベテランファイター、カブ!!』

やや白髪が目立つがそれ以上に燃え上がるような闘気と熱気をユニフォームのように纏う様は正しく男が憧れる漢。炎タイプの使い手カブ。

『ガラル空手の申し子!格闘エキスパートのサイトウ!!』

この中では最も鍛えられている身体、それは自らがポケモンと共に

鍛え続けた証。ガラル空手を修める天才少女。格闘タイプの使い手サイトウ。

『ファンタステックシアター！フェアリー使いのポプラ!!』

杖をつきゆっくりと歩くその姿はまさしくご老人。だが、彼女の纏うオーラはこの中では最も幻惑的で神秘的、故に油断できない。フェアリータイプの使い手ポプラ。

『ハードロッククラッシュャー！岩タイプマスターのマクワ!!』

ヤローにも負けず劣らずの逞しい体格だが、観客席に向けて身体を大きく使った派手なパフォーマンスで応えている。輝くサングラスのジムリーダー、岩タイプ使いのマクワ。

『ドラゴンストーム！トップジムリーダーのキバナ!!』

その男龍が如く、最強のジムリーダーの名を欲しいがままにする。だがそれでいながらもスマホロトムで自撮りしながら観客に応える様はまるでアイドル。ドラゴンタイプ使いのキバナ。

一人かけてこそいるが、これがガラル地方におけるメジャーリーグのジムリーダーたち。即ち……ジムチャレンジャー達が挑まなければならぬ関門、障害、壁。それを見た時、ジムチャレンジャーの反応は分かれる。戦意を失うか、戸惑うか、震えるか——高揚するか。「これが俺達が歩む道に立ちふさがる関門、関所、難関——燃えるなあつやつぱり……この瞬間が一番燃えるっ……!!」

ジムリーダーと戦う瞬間ではない、戦う前に姿を見た時に戦意というのは最高を迎える。そしてバトル中にそれが一気に振り切れて行き限界を突破していく、それが堪らない。今すぐにも戦いたくなくてしまう辺り矢張り自分はどうしようもなくポケモントレーナー何だなというのを自覚させられる。

「リョウ、楽しそう」

「そりやそうだろ……ああつこの地方でも楽しめそうだな……!!」

「——えっ……リョウ、マ……!?!」

高揚しきる裏で、彼へと伸びる者が現れようとした。ガラル地方でのジム巡り、それは彼が思う程、余り良い物になるのか……それは誰

にも分からない。

第12話

開会式も無事に終わった一同、普段着へと着替えていざ次の街であるターフタウンへと向かう事になった。

「それにしたっちゃ、あたしも一緒でよかと？」

とエンジンシティからターフタウンへと向かう橋を渡っている最中にマリイがそんな言葉をかけてきた。折角知り合いになった訳だから一緒にジムを巡ろうという話になったのだがマリイは本当に一緒に行ってしまつていいのかと困惑気味だった。

「良いんだよその位」

「ばってんあたしもジムチャレンジャー、ライバルなんに」

「そげん事気にしえんでよかつちゃん、旅は道連れ世は情けつていうやろ。旅は賑やかな方が楽しかつちゃん」

と少々手を窄めてしまっている彼女へと手を伸ばして勧誘するリヨウマ、二人は会話する時にはハウエン弁を使って会話している。ユウリ達とは普通にしゃべっているのだが、何となく同じ言葉で通じ合えるのが楽しく嬉しい為にそうしているらしい。

「ライバルとか関係ないよ、折角の旅何だもんみんな楽しんで行けばもつと楽しくなるよ」

「そうそう、というかホップの奴はまた先に行つちやつたね……飛躍飛躍〜!!って叫びながら」

折角一緒に行こうと誘うと思っていたホップがいなくなつてしまったのでその代わりという訳でもないが、知り合えたならば共に行く方が楽しいという物だろう。

「行こう、楽しく」

「そ、それじゃあお邪魔する、ね？」

「気にしない気にしない」

という訳でマリイを旅のメンバーに加えて気持ち新たに橋を渡り切ろうとした時に橋の終わり辺りで大きなお手を立てながら旗を靡かせ、ブブゼラを響かせながら大声を張りあげている集団が見えてきた。それは――

「おおっマリイが見えたっ!!」

「今こそ新生エール団の本気を見せる時!!」

『フリーフリーチャレンジャー!!フレフレマリイ!!ゴーゴーチャレンジャー!!』

気持ち新たに妨害行為などをせずにチャレンジャーへとエールを送っているエール団であった。ホテルでの宣言通りに迷惑行為などはせずにジムチャレンジャー全体を応援している、が本人達の中核をなすマリイ最員の応援は欠かさない。寧ろ個人の応援団なのに他の人も確りと応援しているので寧ろこの位は許されるのかもしれない。「ほんなこつ変わつとー……頑張らな……!エールに答えらるーごど!!」

頬を叩きながら気合を入れ直すマリイはエール団の傍を横切る時に手を振って応えながらも頑張ると言い残していく。それを受け取って更に応援をヒートアップさせていくエール団、次の街で先に待っているから!!という力強いメッセージが添えられてマリイは益々やる気になって前へと進んでいく。

「此処が3番道路か………というか人多っ!」

3番道路へと足を踏み入れた感想がそれなのは如何だろうかと思うが、実際問題本当に人が多い。ジムチャレンジャーが多くポケモンゲットや育成、バトルなどに勤しんでいる。開始直後なので気合が入っているという奴だろうか、自分達は出発前に一息入っていた筈だがそれでも結構な人数がこの道路にはいる。

「血気盛んなチャレンジャーはもう先に進んでて慎重派は此処でじつくりレベルを上げてから行こうって感じかね」

「なるほど………って師匠、私もやっぱりこの荒波に飛び込んだ方が良いんですかね?」

「その辺りはご自由につて奴だ。バトルしたければすばいしいやなら素直に断ればいい。お前にも自分がどんな風にポケモンを育てたいとかあるだろ」

「うーん……ゲットしたいですかね、今の所私が捕まえたのつてホルビーだけですし」

ユウリがしたいのは戦力の増強、というよりも一緒に旅をする友達を増やしたいという意図。

「ユウリはどんなポケモンを捕まえたいの?」

「えっと……可愛い奴です!!」

「いやそういう事じゃなくてタイプとかだと思うよ今の……」

ドヤ顔で返答した内容に呆れるマリイ、同じ女子としては気持ちは分からなくはないのだが……確かに可愛いポケモンは優先して捕まえたいたいというのはある。しかし肝心のリョウマ、そしてトウコは凶鑑を取り出しながらこの辺りにいるポケモンにリサーチを掛ける。

「可愛い奴ねえ……おっロコンやガーディもいるのか」

「ワンパチ、いない……」

「はいはいっ次探そうな。だけど炎だとヒバニーと被るよな……新人トレーナーを加味するとタイプカバー出来る奴つと……」

すぐさま凶鑑を取り出して周辺生息ポケモンを調べる姿にユウリも慌ててスマホロトムに出て来て貰って同じようにポケモンを探す、それに続くようにマリイも同じように探してみる姿にソニアは先輩トレーナーに引っ張って貰っている後輩が何処か愛おしく思えた。

「そうだな……飛行タイプのココガラを俺はお勧めしておこう。ヒバニーやホルビーは同じウサギポケモンっていう共通点もあるが、こいつの場合は完全な鳥ポケモンで空を飛ぶから訓練にもちようどいいだろう、それに結構此奴可愛いし」

「私はスカンプーおすすめ、可愛いしタイプもいい」

「ココガラかあ……あつそうだ私アーマーガアに憧れてたんですよ!!
ようしココガラゲットだあ!!」

「スカンプーかあ……うんっ丁度いいかもしれん、あたしはスカンプー捕まえる」

方針を決定した二人は早速目的のポケモンを探していく草むらや木の上や影などを探し始める。そんな姿に懐かしさを覚える、自分も初めてポケモンを捕まえようと張り切っていた時もあんな感じだった。声を出しながらも此処にいる!?!そこか!?!と彼方此方見回っていた。

「ねえっリョウとトウコはなんか捕まえないの？」

「私はワンパチ、決めてる。ガラル初ゲット」

鼻息を荒くしながらもそう語るトウコ。彼女の中ではもう初めてはワンパチにすると決めているらしい、この先に生息していなかった如何するのかと思っただがこの先に丁度出るらしく良かったとリョウマは胸を撫で下ろしながらも何をゲットしようかと考える。

「考え中……っっておっ？」

そんな風に思っている時の事、自分の足に何かがぶつかった。

「ザグッー!!」

下を見てみると……そこには白黒の毛並みを上下させながらも自分の足をちよろちよろとしながらもたいあたりをしてくるポケモンの姿があった。そのポケモンはリョウマとしては馴染み深い物だが如何にも違うので色違いとも思ったが、何やら性格も違うように感じたので凶鑑を向けてみる事にした。

【ジグザグマ まめだぬきポケモン。ガラル地方に生息するジグザグマが最も古く原種と考えられている。好戦的で人やポケモンに対して突進をして挑発を行う】

「ガラル地方のジグザグマ……ってじゃあ俺が見なれてるホウエンのジグザグマの方がリージョンなのか!?!はあく……びっくりだな」

腰を降ろしつつじゃれついてくるようにたいあたりしてくるジグザグマの頭を軽く撫でる、一瞬気持ちよさそうな顔をするのだが直ぐに振り払うにするともう一度突進をした後に準備万端と言わんばかりに地面を足で搔いている。

「成程これは好戦的な性格してるな、良いだろうガラル初ゲットはお前に決めたぜ」

「ジザッー!!」

「良い根性してるな、気に入った!!お前をゲットさせて貰うぜ。エーファイ仕事だ!!」

「フィッ!!」

地方によって常識やポケモンに大きな違いが出てくる、これだから旅はやめられないと思いなながらもエーファイと共にゲットへと向かう

リョウマ。そしてユウリとマリイのゲットはどうなるのだろうか。

第13話

「ホルビーツそのままの勢いのまま飛び出してたいあたり!!」

「ホオルルルルルビツィイ!!」

「ココガア!!?」

地面に潜りかぜおこしやつつくなどを回避しながら地面を潜り高速移動する事が出来るホルビーツ。単純なあなをほる攻撃では飛行タイルのココガラに意味は無い、ならば意味を持たせればいい。相手に攻撃もされずにトップスピードに加速し放題なフィールドを使う為の技だと思えばいい、大地を揺るがしながらも空を舞う真下から飛び出したホルビーツ、こうそくいどうやでんこうせつかで加速したような勢いでのたいあたりは通常の数倍の威力となる事だろう。それをまともに受けてしまったココガラはヨロヨロとふら付いた動きで地面へと落ちて行く。

「よしっお願いっモンスターボール!!」

見事なサイドスローから投げられたモンスターボールは正確にココガラをトレースしながらホーミングするような弧を描きながらも正確に命中し、紅い光線を放ちココガラを内部へと収納しながら地面へと落ちる。着地したホルビーツはそれをユウリと共に固唾を飲んで見届ける。一回、二回、三回……揺れが収まり独特の音と共にボールの揺れは収まった。

「やったあっ!!ココガラゲットオ!!」

「ホツビツ!!」

「ホルビーツもお疲れ様あく!!貴方っつてば本当にバトルセンスいいよ!!」

ボールを回収しながらもホルビーツを抱き上げて撫でまわす、ホルビーツは少々照れくさいのか顔を赤くしているが心地よさそうにしている。そして早速ゲットしたココガラを出した見る事にした。

「ココガラ出しておいで!!」

「ガラア!!」

ボールから飛び出したココガラは差し出されたユウリの腕へと留

まった。

「これから宜しくねっ、今日はお祝いだから美味しいご飯作るからねっ♪」

「ガラー！」

「おっそつちもゲットできたみたいね」

とココガラに頬擦りしているとマリイが腕にパートナーであるモルペコを抱きながらやって来た。足元にはスカンプーが居る事から如何やらマリイもゲットは成功したらしい。

「あたしもゲット出来た、結構元気いい子」

「私も出来たよ！今日は記念日だから美味しいご飯にしないとね!!」

「それは良いけど……ユウリって料理できるの？」

「う”っ……!!」

まるで凶星を突かれたかのように硬直してしまうユウリ。バトルの面ではずば抜けたセンスを持つ彼女なのだが苦手な分野は存在している、それは料理。現在ガラルでは大人気になっている料理であるカレーライス、余程の事がなければ失敗もしないこの料理も失敗して母親からキッチンに立つのは早いわねと苦笑いされてしまったのはつらい記憶……。

「だっ大丈夫!!師匠は料理も得意って言ってたからこの旅で上達します!!」

「そうだと良いけど……」

「ちっ因みにマリイは出来るの?」

「大得意」

「裏切り者オ!!」

「何ん裏切りばい」

と若干呆れられて視線を受けながらもリヨウマたちの元へと戻る事になると……そこではエーフィを繰り出してジグザグマとバトルを行っているリヨウマの姿があった。

「あれっ!?師匠がバトルしてる!？」

「あっお帰り。ええっ丁度ジグザグマがちよっかい出してきたのよ、それで気に入ったんだって」

「ジグザグマ……あの子も可愛い」

とソニアとトウコから事情を聴きつつも折角なのでリヨウマのバトルを見学する事にした。そう言えば結局の所リヨウマがどの位の腕前でその相棒たちもどのぐらい強いのかも正確に把握しきれていない。唯一分かるのはワイルドエリアにて、エリアボスのイワークの攻撃を一蹴した実力があるという位。一番付き合いの長いエーフィ、それはどんな実力なのか……特に弟子であるユウリはホルビーやココガラ、そして何時の間にか出てきたヒバニーと共に目を皿のようにして見つめた。

「ザグウウウツ……!!」

「フィ……ファイ」

前脚で地面を蹴りやる気十分と言った様子のジグザグマ、エーフィはいい面構えをしているじゃないとまるで挑発するように尻尾を動かす。その挑発を受けて立つ!!と言わんばかりに一気にフルスロットルになりながら突進していくジグザグマ。良い速度だとリヨウマは内心で良い奴を見つけられたと喜びながらエーフィへと目配せをする。

「フィッ」

軽く横にズレただけ、ほぼ最低限の移動のみで回避する。真横を通り過ぎようとするがフルブレーキを掛けながらも地面を蹴って跳躍。そのまま全身の毛を逆立てるとそこから無数の光の針をミサイルのようにエーフィへと放った。

「ミサイルばかりか、後方へ飛び退け！」

「フィッ!!」

流石に効果抜群の技などは喰らいたくはないと飛び退く、先程までいた場へと降り注いでいく針の雨。その量も中々に大したものだと思つた直後にジグザグマはその前まで移動すると思いつ切り息を吸い込んだ。

「ジイイイ……」

「っ!?ハイパーボイスでかき消せ!!」

「ザアアアアアツツ!!」

「フイフイフイフイツツ!!」

周囲に木霊する大声、ジグザグマのそれを遙かに上回るパワーのエーフィのハイパーボイスはジグザグマのそれを圧倒し逆に吹き飛ばしてしまった。

「なんてパワーのハイパーボイス……!!」

「流石師匠のエーフィ!!」

「でも、なんて急に……?」

「ジグザグマが上手かった」

マリイの疑問に答えたトウコ、僅かに微笑みつつも感心を纏っていた。ジグザグマが放った技はバークアウト、悪タイプの相手の特殊攻撃力、特攻を確定下げる効果を持つ技。火力が下がるのを嫌ったという訳ではない、ジグザグマは地面に刺さったミサイルばりの目の前でバークアウトを行う事でバークアウトにミサイルばりを乗せて攻撃しようとしたのである。

「えっマジ!?あのジグザグマそんな事を!?!」

「悪と虫、二重の弱点、それを避けた」

「あっそれでエスパ―技じゃなくてノーマルタイプのハイパーボイスだったんだ!!」

「あの一瞬でそんな事まで……」

レベルは歴然、エスパ―技でも対処は可能だったかもしれないが確実性を取って広範囲に広がるノーマル技を選択した。いきなりの指示に応えたエーフィも凄いが咄嗟にジグザグマの意図を見抜いたリヨウマも途轍もない。

「ジグウウウツ……!!」

バークアウト、ミサイルばりを複合した技も呆気無く破られた上にハイパーボイスはそれをも巻き込んだためか威力は上がっていた。それを受けたジグザグマは大ダメージを受け動けなくなっていたが必死に身体を起こしてまだ戦おうとしている。中々に良い根性をしていると思わず口角を持ち上げながらボールを取り出しながらジグザグマに近づく。

「ジグツ……」

まだ戦えるという意志を誇示するように此方を鋭く見るジグザグマ、そんなジグザグマに優しくボールを押しあてた。ボールへと吸い込まれていくジグザグマ、直ぐにゲット成功の音が鳴り響くが直ぐにジグザグマを出した。ジグザグマはびっくりしたように辺りを見回しているが頭を撫でられて顔を上げると微笑みかけてくるリヨウマを見た。

「どうだジグザグマ、俺と一緒に来ないか。お前はもつともつと強くなれるぞ、お前の凄さをもつと俺に見せてくれ」

「ジグツ……グザ!!」

僅かに悩んだのちに決めたと言わんばかりにリヨウマの方へと駆けあがって声を上げる。主人と認めるかのような高らかな雄叫びに頬を緩める。

「改めてジグザグマゲットだな」

「フィ〜♪フィィィィィィィイツツ!!」

「ジツジグツ!」

ゲットを祝おうとしたエーフィだが、ジグザグマが肩へと登ったのを見て同じように左肩へと駆け上っていく。そして此処は私の場所だと主張するかのようにジグザグマへと喋り続けている。思わず困惑するジグザグマだがリヨウマに喉を撫でられると気持ちよさげな声を上げる。

「さてとっ初ゲットのお祝いに今日は豪華な飯にするか!!」

第14話

「おやつまだこのような場所にいるとは……存外にチャンピオンの推薦というのは大した事はないのかもかもしれませんね」

「あんた誰」

間もなく3番道路からターフタウンへと抜ける唯一の道であるガラル鉱山へと足を踏み入れようとしていた頃の事、まずは腹ごしらえをしてからにしようという事で昼食の準備をしていた時の事だった。リヨウマから鍋をかき混ぜる役目を任せられていたユウリへと唐突に挑発めいた言葉が飛んできた。なんとも目立つ蛍光ピンクのジャンパーを着込んでいる少々目つきの悪い少年、自分のことを馬鹿にするような言葉だがユウリは何方かと言ったらお前は誰かということが気になっていた。

「いいでしょう名乗りましょう、僕はリーグ委員長であるローズ委員長に推薦されたトレーナーのビート。貴方よりも期待が高いジムチャレンジャーですよ」

「へっく委員長から推薦されてるんだ、凄いなだ」

と空返事をしながらも懸命に鍋をかき混ぜているユウリ、彼女の中でも新しく現れたライバルなんかよりも遥かに昼ご飯の質のほうが遥かに大事だというのが見て取れる。それにムツとするのだがそこへ切った食材を持ってきたリヨウマが様子を見に来た。

「よしっそれじゃ追加の材料入れるぞ」

「うへえっまだ増えるんですか!!?」

「お前さんが具材一杯で豪華なほうが良いって言ったんだろ……ほれっ頑張っってかき混ぜろ」

「ウイゝス……」

鍋の中へ投下されている野菜の数々、その様子に辟易しつつも我慢しつつ木べらで中身をかき混ぜていくのだが強火にするリヨウマに抗議の声を上げる。

「ちよつと師匠火強めるんですか!？」

「こうした方がいいの、ほらっ腕休めたら焦げて美味しくなくなるぞ」

「師匠の鬼いつ!!悪魔っ!!サデイストオ!!」

「飯抜きにすんぞ」

「すいませんでしたア!!」

寸劇のようなやり取りに思わずポカンとしてしまうビートだが直ぐに気を立て直して咳払いをしつつも今度は標的をリヨウマへと差し向けるのであった。

「これはこれは……巷で噂のこの地方のチャンピオンとハウエン地方の新旧Wチャンピオンから師弟とは……まあだからどうしたといいますがね、チャンピオンよりもリーグ委員長のほうが偉いのは明白つまり、僕の方が期待されているということになりますからね。巷で騒がれるものなどミーハーな見る目のない者たちの戯言いうことです」
「随分と舌が回るなお前さん、余程自信があると見えるな」

「ええっ当然、何なら試してみますか。まあ他地方の田舎者のあなたが無残に負けて恥をさらすだけでしょうがね」

傍若無人な振る舞いと非常に失礼な言葉遣いに思わずユウリはイラつと来てしまった。正直言つて委員長のほうが偉いとかチャンピオンの推薦なんて大した事が無い云々の事は正直どうでもいい、だがリヨウマのことを田舎者と呼んで馬鹿にすることは許せなかった。そもそも他地方の方々に失礼すぎる言い振りだ。

「あなた、本当に委員長に推薦されるの?」

「何を言いますか、委員長からの推薦状を受け取り正式にチャレンジャーとして受理されている。これ以外に何を言うというんですかね」

「ふくん……じゃあ貴方を推薦した委員長の底が知れるね」

「……今、なんて言いました」

「底が知れるって言ったのよ」

ビートの表情が変わる、先ほどまでの傲慢で自慢げにし続けていた表情が変化して怒りを帯び始めているがユウリはそれに屈さずに続けた。

「貴方は今、師匠の故郷を馬鹿にしたのよ。それを言った貴方を推薦したのはガラル地方のリーグ委員長、貴方の発言は委員長の評価とも

直結するって事」

「ハッ事実を事実と言って何が悪いのですか」

「仮に事実だとしてもそんな発言してみなさい、大バッシングも良い所よ。それだけ委員長のことを敬愛しているなら少しは態度に気を付けたらどうなの」

エール団の一件も踏まえて牽制球を投げるユウリ。ビートが仮に委員長の推薦を受けているとしたら、無用な発言などは避けなければいけない立場になる。それはチャンピオンの推薦を受けているユウリやホップも同様だが……ビートは明白にこちらを侮辱している発言を続けていて、これが何かに拾われたら大炎上も待ったなし。バチバチとぶつかり合う視線の中で肝心のリヨウマは特に気にしていなさそうな顔をする。

「落ち着けユウリ、あと腕止めるな焦げる。マリイ達の分の飯が消えるぞ」

「だって師匠幾らなんでも失礼すぎますよ!?!遠回しにハウエン地方のトレーナーとかポケモンリーグ全員敵に回してるようなもんですよ!?!」

「気にするだけ無駄だ、あと俺はこのぐらい気にしない。ハウエンの良さはもつと深い所にあるからな」

「むうっ……」

正直なところ、ユウリがここまで怒ってくれた事は素直に嬉しい。まだ師と弟子としては未熟なところがあるというのに彼女は自分が師であることに誇りに思いながら弟子であることを喜んでくれるという事にも繋がるのだから。同時にこれは真面目に師匠業にも精を出さなければいけないという柵もあるが、そちらは何とかなるだろう。

「んでまあビート、だっけ。まあこの際誰が推薦してくれたかは置いておこう、結局の所このチャレンジが物を言うのはどこまで行けるかだろ。究極的に言っちゃえば実力が重視される、違うか」

「……思っていた以上にわかっているようですね」

「そりやどうも、ガラル地方以外のジム巡りは此処みたいにとレー

ナーを支援しているわけじゃないから自分の力で乗り越えていく形式だから過酷でな」

ここでのジム巡りは興業でもある、故にチャレンジャーを支援するシステムが確りとしているというのが一番の印象だった。だがほかの地方では基本的に此処までの支援はない、自力でジムの挑戦ルートを構築し対策を練り、次の町までの物資の調達や野宿なども含まれてくる。故にトレーナーとポケモンのレベルはよりハイレベルになっている。

「試してみるかい、ガラル地方以外の実力つてやつを」

「望むところですよ、完勝して貴方に吠え面をかかせてやりますよ」

「上等だ。んじやその前に——飯、一緒にどうだ？」

「——えっ？」

すぐにバトルするつもりだったビートは思わず呆気に取られてしまった、あんなに馬鹿にしていた自分と一緒に食事を？何を考えているのか、食事という名目で自分の手持ちを確認するつもりなのかと警戒するがユウリがすぐに声を上げる。

「師匠何言つてやがりますかあ!!?なんで一緒に食べるっていう選択肢が出てくるんですかあ!!」

「だって飯は大勢の方が楽しいし美味しいだろ、折角だガラルの都会人様に料理の味でも見てもらおうかと思つてな」

「それなら私がしますよお!!」

「いいからいいから。ほらっ兎に角来いよ、俺特製のカレーとサラダにスープだ。栄養満点で身体にもいいぞ」

「ああっええつと……フ、フンそこまで言うんですから不味かったら承知しませんからね」

とビートも食事に参加することになった。ソニアたちはビートに驚いたが挨拶をしてから直ぐにご飯になった、ビートは少し離れた場所ので食事に手を付けつつリョウマのホウエン地方の伝説のポケモンについての話に聞き耳を立てるのだが……大したこともないだろうと思いつつ口にした料理の味に思わず目を丸くした。

「……美味しい」

「そりや良かった、ホラっどんどん食っていいからな」

あれ程までに失礼なことを言った自分にも笑顔で接してくるリョウマに毒気を抜かれたように無言で食べ続けるのだが……運ぶ料理の味は絶品でついつい手が進んでしまった。だがそれは彼の中に疑念を孕ませた。

「(如何して、如何してっこんなにも胸が満たされていくんだ……? この暖かさは……)」

「お代わりいるか?」

「えっ……いえ自分でやります」

無意識的に、リョウマの笑みに瞳を奪われ胸が暖かくなっていた。初めてかもしれない暖かさに困惑しながらもビートは具沢山のカレーの2杯目を盛った。

第15話

「さて腹ごしらえも済んだ、やるか？」

「ええっ美味しい昼食には感謝しますが、その程度で手加減する程僕は優しくありませんから覚悟なさい」

「そりゃいい。この程度で手加減されちゃ興醒めだし馬鹿にされてる気分になっていけない」

昼食も終え、洗い物も終わってから距離を取ったりヨウマとビート。これから二人のバトルが行われる、遂にみられるリヨウマのバトルの冴え、ジグザグマでその一端を見る事は出来たがまだまだ深い所まで見たいという欲求があるユウリはこの戦いを目に焼け付けようと必死になるが姉弟子であるトウコはそこまで興味なさげに紅茶を啜っている。

「ちよつと先輩っ師匠が戦うのになんでそんなに暢気してるんですか」

「リヨウマのバトル、私には関係ない」

「淡白だなあ……解説お願いしたいのに」

「その位自分で分析する」

ケチツ!!と文句を飛ばすがそれにも一理はあると思う。

「でもリヨウマさんってどのぐらい強いんだろ、ジグザグマの時はそんなに分からなかったけど」

「取り敢えず他の地方のリーグの常連だとか言ってたしかなりの物なんじゃないかしら……」

「ゴクリツ……!!」

マリイへの言葉へと以前言っていた言葉で応える、きつと強いのだろう程度の事しか言えないだろうが逆にそれが興味を掻き立てられて行く。

「ルールは如何する」

「3対3で良いでしょう、僕の手持ちは今三匹ですから」

「よしそれで行こう。おいトウコ」

「何」

「暇だろ、ジャツジやれ」

その言葉に全力で嫌な顔をするトウコ。出来ない事はないがレベルの高いトレーナーであるリョウマならば自分だけではなく相手のポケモンの様子を察してジャツジをするなんて朝飯前、態々自分がする必要はないと言いたげ。

「さっさとやれ、公平に頼むぞ」

「はいはいっ……全くリョウウってばイケズな癖に強引……」

「なんかほざきやがりましたか馬鹿弟子」

「うんにや何も」

一瞬怒る一歩手前の声を出した事で真面目にやる気になったトウコはさあやるぞ!!とワザとらしく言いながらもジャツジの位置に付く。そんな様子を見てビートはこの師弟関係は本当に大丈夫なのだろうか……と柄にもなくユウリの事が心配になってきたのであった。

「さてとっそれじゃあ——ジクザグマ初仕事だ!!」

「グザツー!!」

「ユニランツ!!」

ほぼ同時に投げられたボール、リョウマが繰り出したのは捕まえたばかりのジグザグマ。対するビートが繰り出したのは卵割中の卵のような姿をしたポケモン。エスパークタイプのユニラン。出て来たジグザグマに相性が悪いか……と内心で思う中でリョウマの足元をチヨロチヨロしているジグザグマが目に入る。

「よしよしっ……お前さんの初バトルだな、さあ思いつきり楽しんで来い」

「ジグ!!」

強く頷きながら今にも飛び出していきそうな勢いなジグザグマ、その言葉を聞いて僅かに苛立ちが募る。捕まえたばかりのポケモンに先鋒を務めさせる、相性が良いから勝てると踏んでいるのだろうか。ならばその自信ごとぶっ飛ばしてやると思いながら開始の合図を待つ。

「それでは——開始!!」

「ユニランっサイケこうせん!!」

「ユニニニニニツツ!!」

サイコパワーを虹色の光線へと変えながら一気に放出し攻撃するサイケこうせん、ワザの威力は中々あるしユニランの特攻を考えると良い選択肢だと思いつつも即座に狙いを看破する。

「まもる!!」

「ジグッ!!」

何と此処でまもるを選択した。緑色の防御壁が展開されて身体を保護するバリアとなる技で受けたら危険な技などを無効化する際に用いられるが、悪タイプにエスパータイプの技は効果がないのに何故……と思う中でサイケこうせんがジグザグマの目の前の地面に炸裂して周囲に石礫をまき散らす、それはバリアによって防御されるが、守らなければ確実にダメージを受けていた。

「良く見抜きましたね」

「俺も良くやる戦法なんでね、鼻が利いたのさ——ミサイルばり!!」
「避けなさい!!」

解除と同時に針を飛ばす、虫タイプの技も受けては不味いと即座に回避させるがそこへジグザグマが走り込んでくる。トレーナーが何も指示をなしで突進してくる、暴走かと思いつつもユニランに回避を命ずる。下を潜りつつもその時にリョウマは叫ぶ。

「そこだったあたり!!」

「ジイイイグウ!!」

「ユニツ!？」

突然の急ブレーキからのたいあたりを諸に受けるユニラン、不安定な体勢からのたいあたりだったので威力はそこまでではないがそれでも吹き飛んでしまっている。

「動じるなユニラン!!エナジーボール!!」

「ユニー!!」

吹き飛ばされながらも緑色のエネルギー球を連発して攻撃するユニランにジグザグマは咄嗟にまもるを発動して防御を固めた。しかしビートは連続でエナジーボールを指示してまもるを維持出来なく

なるまで攻撃し続け、遂にそれを破ったジグザグマへと攻撃を当てた

——が

「そこだバークアウト!!」

「ジイイイイ……ザアアアアアアツツ!!!」

「ユニイイイイツツ!!!」

「なっ!?!」

後方へと吹き飛びながらも息を思いつきり吸ったジグザグマが放つ渾身のバークアウト、それはエーフィに使用したのと同じミサイルばりとのコラボ技。突き刺さり続けていた針を声の音圧で再度飛ばしてミサイルにしながらも悪の咆哮と共に攻撃するそれをまともに喰らい続けてしまったユニランは目を回してフラフラと地面へと降りてしまった。

「ユニイイ……」

「ユニラン戦闘不能、ジグザグマの勝ち」

「……強い……!!」

思わず素直に称賛してしまった、それ程までに強いと思える。タイプ相性だけではない、ジクザグマの動きもワザの連携も。これがホウエンの新旧Wチャンピオンに推薦される男のトレーナースキルなのかと思ってしまう。捕まえたばかりジグザグマにユニランが圧倒されるなんて思ってもみなかった——がリョウマはジグザグマを呼び寄せると眉間を指で押した。

「こらっ勝手にワザ使うなっの、もう野良バトルじゃないんだからさ」

「ジツジグウ……グザツグマザ!!」

「まあねえ、あそこでのまもるは悪くはないがこっちの指示もないのに突進するなっの」

「ジグウツ……」

しょんぼりと落ち込んでしてしまったジグザグマ、だがそれはビートを驚かせる材料にしかならない。勝手に判断していた、矢張りあれは暴走だったのかと思いつつもそれに合わせられるような指示を飛ばしていたリョウマが信じられなかった。ポケモンバトルの基本は

司令塔となるトレーナーがポケモンに指示を出し、相手の手方を伺いながら臨機応変に対処する。だが今回は自分のポケモンの自由な行動に対処しなければならぬ予想外の事態にも平然と対処出来る腕前に——素直に驚き、称賛していた。

「でも筋はいいぞ!!これからもっと練習すればお前強くなれるぞ!!」

「ジグくザグザグマツ!!」

「だけど未勝手な行動したからお前はこれで終わりな」

「ジツジグウ!？」

褒められて照れていたのにもうバトルは終わりと終わってしまったてそっそんなあつ!!?と言いたげなりアクションをした後にマリイが抱き抱えてよしよしと撫でて励ます。何とも賑やかな奴だと思いつつ次のボールへと手を伸ばす。

「本当に先程のジグザグマは捕まえたばかりなんですか」

「まあな。ちよつと血気盛ん過ぎるからこれから注意しねえとな」

「……次行きます。ゴチル!!」

リボンを付けた少女のような小さなポケモン、ユニランと同じくエスパータイプのゴチルだった。ならばとエーフィのボールへと手が伸びそうになるのだが、その隣のボールが揺れているのに気づいて其方へと手を差し向ける。

「よしっそれじゃあ——サーナイト仕事だ!!」

「サナアツ……」

ゆつくりと、優雅に、貴婦人のように静かに舞い降りたのは純白のロングドレスに身を包んだ女性のような美しいポケモン。リヨウマの三相棒の支柱、初めて捕まえたポケモンであるラルトスの最終進化系のサーナイト。

「ふわあつ……綺麗……」

「ドレスみたい……」

「あれがサーナイト……」

「ジグウ……」

ジグザグマは女性陣と共にその美しさに目を奪われていた。何て

幻想的で神秘的な美しさを醸し出すポケモンなのか……そんな様子に気付いたのかサーナイトは静かに頭を下げながら挨拶をした。

「ほうっサーナイト、ですか……確かに美しい。美しいですがその美しさがどこまで通用するか試して上げましょう!!ゴチム、でんじは!!」

「チイムッ!!」

最終進化系であるサーナイト、レベル差は先程のジグザグマとは比較になんてならない筈。だがそれが如何した、レベルだけが勝負を決めるのではないと言いたげにでんじはを放つ。麻痺が決まれば勝利の確立は上がる、シンクロの危険もあるがそんな危険に躊躇する訳には行かない。迫りくる電撃にサーナイトは慌てる事も無く動かず指示を待ち続ける。

「受け流し」

「サナツ」

その指示に少しばかり腰を落とすと指揮棒のように腕を振るうとその腕にサイコパワーを纏わせてでんじはを命中の寸前で地面へとその矛先を向けさせて攻撃を無力化する。何とも優雅な動きと言わざるを得ない、ビートも内心でその美しさに感激しつつも次の指示を飛ばす。

「これならっシャドーボール!!」

「チイル!!」

これなら利くだろと発射される黒紫色のエネルギー弾、エスパークイプには効果抜群のゴーストタイプ。連続発射されていくシャドーボールに対してサーナイトは全く焦らない、例えそれが自分にとって脅威であろうともリョウマの指示を待つ。

「かみなりパンチで撃ち返せ」

「えっ……かみなりパンチい!?!」

「サアツ……ナツ!!!」

思わず声を上げて驚愕してしまうビートだが、次の瞬間には両手に逆らん限りの雷撃を携えながら拳を握ったサーナイトが構えを取り迫ってきたシャドーボールを殴り飛ばした。優雅で優美なイメージ

のあるサーナイトには全く似合わない姿だが、その威力は折り紙付き。シャドーボールは放たれた時よりも更に凄まじい速度と雷を纏ったままゴチムへと向かってくる。

「まっまもる!!」

「ゴチツ!!チムウウウウツツ!!!」

まもるを展開するゴチム、これならば守り通せると思ったが直後に襲いかかる現実は更に驚く。迫ってきたシャドーボールはまもるへと激突していくのだが爆発しながらもその奥からゴチムが吹き飛ばされてきたのである。

「そ、そんなんっ!」

「チツ……ムウウウ……」

「ゴチム戦闘不能、サーナイトの勝ち」

勝利宣言を貰ったサーナイトは拳を解しながらも身体の埃を払うと丁寧に頭を下げてゴチムへの敬意を示した。だがそれ以上にインパクトがあつた為に入つてこなかった。

「えええっ!?!サ、サーナイトってエスパータイプだったよねソニアさん!?!あんな凄いパンチ打てるポケモンでしたっけ!?!」

「い、いや私だって初めて見たわよあんなの!?!物理方面に強いエルレイドならまだしもサーナイトであんな事するなんて初めて見たわ!!」
「これがリョウマさんのポケモンの力……」

まさかの物理サーナイトに驚きを隠せない面々、既に知っているトウコも当時は本当に驚いた。だからみんなの気持ちは良く分かる、本当に面食らうのである。

「な、なんですか今のは!!?見た事がないようなパンチを打つサーナイトなんて……」

「まあ驚くよな、でもこれが俺のサーナイトのスタイルって奴だ——
——こいつ、エスパータイプの技が苦手なんだよ」

「サナツ……」

「ハアッ!?!」

第16話

「エスパー技が苦手!?それはあれですか、僕のポケモンとのレベル差の自慢をするためですか。エスパータイプでありカロスのチャンピオンの相棒も務められるほどのポケモンが」

「いや誇張表現とか一切抜きでマジで苦手なんだよ俺のサーナイト」

そこに嘘も偽りもないというリヨウマと少しばかり恥ずかしそうにしながらも頷くサーナイト。だが到底受け入れられるような内容などではない、エスパータイプの中でも知名度そして実力としても申し分ないサーナイトがエスパー技が苦手ということは信じられない。

「本当。リヨウのサーナイトはガチで苦手なだけ」

「まさか、いやそんなっ……!!」

「師匠のポケモンにそんな子がいたなんてビックリ……」

ユウリもただただ驚愕し続けていた。彼女にとつてのリヨウマは師匠であり超格上の凄腕トレーナーという認識を持ち続けている。なのでエーフィを初め、彼のポケモン達は洗練された圧倒的な強さを持っていてのだろうと思いつけていたのにエスパータイプの代名詞ともいえる技を苦手としているというには予想外にもほどがあった。

「正確に言えばエスパー技は使えるんだよ、試しにほれっ」

と近場にあつた石ころを手にとって軽く投げてみると顔に迫ってきたそれに手をかざして浮き上がらせて掌の上で保持し続ける。正しくエスパータイプの芸当、出来ているじゃないかと思うかもしれないがサーナイトはそれをゆつくりとビートのほうへと移動させようとするのだが……2メートル程度のところで石ころは揺れ始め、3メートルを過ぎてしまうとサイコパワーは四散して地面へと落ちてしまったのである。

「今のつてもしかして……リヨウ、サーナイトってサイコパワーを放出する事が苦手って事なの?」

「そういう事。だからさっきユニランがやってみたいなサイケこうせんも出来ないし遠距離のポケモンをねんりきで浮かび上がらせて攻撃するとかも全く出来ない」

リヨウマのサーナイトは決してエスパー技が出来ない訳ではないが極端に苦手としてしまっている。パワーを保てるのは最高で2メートル、それ以上になると途端にサイコパワーを維持出来なくなり3メートルになると完全にアウト。サイコパワーを用いたエスパー技による一方的かつ変幻自在な戦法というのがサーナイトは取る事が出来ない。

「それにサーナイトと俺が勘違いしてたのもあるだろうな……お互いにバカだったよな」

「サナアツ……サ、ナア」

「悪い悪い。でももういい思い出だろ」

「ナアツ……ト」

「ごめんごめんってば」

懐かしむリヨウマに対して顔を赤くしながらもやめてください……と言いたげなしぐさをするサーナイト、最後にはもう知りませんとそっぽを向いてしまいが謝罪を受けると直ぐに向き直ってしようがありませんねつと言いたげな仕草をする。その光景はトウコからすれば下手な幼馴染よりも幼馴染をしていると思えるほどに絆を感じさせる。だが一同は思った、一体如何したか全くわからなかった。

「ばってんリヨウマじゃん、馬鹿って何ばしたと」

「ああ、ラルトスん最終進化系にサーナイトんほかにエルレイドっているやろ」

エルレイド。キルリアから進化するもう一つの進化先。エスパータイプの名手とも知られるサーナイトと違いエルレイドは格闘タイプを得て接近戦を得意とするポケモン。

「確かにいるけど……それがどうかしたの？」

「ラルトスはエルレイドに成りたがってたんだよ、俺もそんな時は旅に出たばかりで知識もまだまだでな。ラルトスがそうなりたいたいなら俺もそうしてやろうって思ってたんだよ、だから昔からエスパー技が苦手だからエルレイドになった時のためにそれを生かした接近戦法を研究して練習してたんだよ」

ラルトスを捕まえたばかりのこと、偶然見ていた雑誌とポケモンバ

トルの実況動画。そこに映っていたのは四天王が使っていたエルレイドの姿、それを見たラルトスは感銘を受けた。エスパ―技が出来なくてもエルレイドならば自分も強くなれるのでは。そこでリヨウマも全面協力して必死に戦い方の研究をしつつ、進化に必要なめざめいしという進化の石を探し続けていた。キルリアに進化してからは石の洞窟で事情を聴いたダイゴから貰ったかわらぬのいしを持たせることで進化を抑制。そして遂に石を見つけたのだが……

「なぜサーナイトに進化しているんですか!？」

「いやさ……サーナイト、メスだったんだよ」

『……はっ?』

「いやあ無知って恥ずかしいよなあ……アハハハハッ!!」

サーナイトも笑っているリヨウマに同意の微笑みを向けている、これに関してはもう二人の中では完全に終わっているのが笑い話に出てきているらしい。つまり、リヨウマと当時のラルトスはエルレイドにはめざめいしという進化の石が必要な事は知っていたがエルレイドにはオスの個体しか進化出来ない事は知らなかったのである。それを知ったときはもう共に顔を見合わせて暫く硬直していたのも懐かしい。

「そ、そんな間違いを……?」

「そういう事。だけどまあせっかく磨いたスタイルを捨てるのも勿体無いしだったらこのまま自分が何処まで行けるのかって開き直ってな、それでかわらぬのいしを外してサーナイトに進化させたんだよ。そしたらサイコパワーがある程度放出出来るようになったから幅は広がったな」

それまでは身に纏う程度の事しか出来なかったのが放出出来るようになったというのは大きな進歩だった、それでも他のエスパ―タイプと比べてしまうと劣ってしまう点があまりにも大きい——だからこそ明確な差別化、このサーナイトにしか出来ない事、エルレイドに憧れたからこそ身に着けたスタイルをサーナイトで発揮してやろうと決めたのである。実際その効果は絶大だった。

「実際効果は靚面だった、エスパ―タイプは接近戦が不得手っていう

先入観から近づいて来てくれるからな。そこを狩る——これが俺のサーナイトにしか出来ない戦いだ」

「サナ」

「——成程、貴方はサーナイトを。サーナイトは貴方を心から信じているというわけですか」

あまりにもリスクな選択肢、虚を突きすぎて誰も取らないであろう戦法。優秀な特攻を持つならばこうするだろう、定石はこれの筈だ、という意識を逆に掴む。そしてそれを知っている相手への対策もしてある、それはエルレイドを指して必死にスタイルの模索や練習をしたからこそ得られた物だった。

「そう、大好きだぜこいつの事は」

「サナアツ」

サーナイトはその言葉に恥ずかしそうに答えるように隣に立ちながら少しばかりに寄り掛かった、幸せそうな顔をするサーナイトだが直後にエーフィが勝手にボールから飛び出してきてリヨウマの肩に乗ると離れろくと威嚇するに唸る。それに余裕を見せながらクスクスと口元を隠して笑うサーナイトに飛びかかろうとするが咄嗟にリヨウマが抱きかかえる。

「コラツやめろつての!! ったくお前つて奴は……」

ポケモンと仲良さそうに戯れ、ポケモンはトレーナーへと全幅への信頼と絆で結ばれている光景。そんな様子を見たビートはゴチムにご苦労様でしたと労いの言葉をかけてからボールへと戻した。

「何だ止めるのか」

「ええっそうしておきます、どうやら僕が勝てる相手ではないようですね。認める物も認めない程僕は愚かではありませんから」

「そっか。んじやまた今度バトルやろうぜ」

「……ええ、機会があれば———お願いしますよリヨウマさん」

まるでリヨウマを認めるかのような発言をするビートに思わずユウリは目を見開くのだが、直後に柔らかな笑みを崩し彼は彼女に対して挑発的な態度へと戻ってしまった。

「そして貴方とも機会があればバトルしてあげますよ、僕のほうが強

いということとその身に刻んで差し上げましょう。感謝してくださいね」

「なっ!!?」

言いたいことを言い切った、と言わんばかりに去っていくビート。サーナイトはそんな彼へと手を振って見送るのだが、肝心のユウリは怒りながらも文句を飛ばしている。

「そっちこそ戦うときは師匠の修行で強くなった私にコテンパンにされて泣いたって知らないんだからね、バカッバアアカッ!!この蛍光ピンクパーカアア!!」

——これはピンクではなくマゼンタです物知らず!!これだから貴方はチャンピオンの格を下げるというのです!!

「何馬鹿な言い合いしてんだよお前ら……」

遠くでユウリの言葉に言い返してから去っていくビートを見送るリョウマ、これからの旅に僅かな不安を抱えつつも次の街へと思いを巡らせるのであった。

「僕も成れるのだろうか……いや何を言ってるんだ、僕はローズ委員長に……委員長に……」